
舞踏会にはガラスの靴で

天ヶ森雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

舞踏会にはガラスの靴で

【Nコード】

N0680R

【作者名】

天ヶ森雀

【あらすじ】

母が大金持ちの商人と結婚したと思ったら、義理の父は呆気なく死んでしまったの。啞然とする私たち（母と姉と私）に残されたのは傾きかけた商売と義理の妹（母にとっては娘ね）だった。

この義妹、見た目は極上の美少女だけど、全く何もできない役立たずだったのよ！

見てなさい！ 私が一から家事を仕込んで見せるから！

シンデレラパラルルにて、目指せ暴走乙女チックコメディー

T I I N A M I 同時掲載。

プロローグ

母親が再婚したのは大金持ちの商人だった。

ウチは一応貴族だったけどとくに落ちぶれてたし、実の父親は大酒飲みのロクデナシだったから、全く異論はない。寧ろ大歓迎。だって大金持ちならどんなドレスだって作り放題よ？

布地をケチケチせずにフリルもひだも取り放題だし、しかも裾をレースでだって飾れるのよ？

考えるだけでうっとりしちゃう。

しかも金持ちの父親には、もれなく妹がついてきたの！

勿論彼の妹って意味じゃないわ。私のよ！ わ・た・し・の！

まあ正確には私とリリア姉様の、なんだけどね。

でもこれがまあ、お人形さんみたいに可愛いの！

白いマシユマロみたいな肌、波打つ金髪。ぱっちりした目は透き通ったマリンブルー、唇は珊瑚色で、頬は薔薇水晶よ！

幼い頃から貧乏で、人形ひとつ買って貰えなかった私は狂喜乱舞したわ。この子で着せ替え遊びを想像してみたら、うっとりしてしまった。きつと何を着せても超可愛いに違いない。

でも、運命はそう甘くなかったのよね。そうそう良い事ばかり続く筈がなかったの。

母親の再婚相手だった丸顔ぼっちゃりのお義父様が、突然亡くなっちゃったのよ。

心筋梗塞って、何それ？

啞然としちゃったわ。

しかも多額の借金発覚。…おーまいがっ！

うそでしょお！？ ようやく手に入れた贅沢な生活は一体どうなるの~~~~~!!!

初めに立ち直ったのはお母様だったわ。苦勞や不幸に慣れてたからだわね、きつと。

自らお義父様の後を継いで、商売に乗り出したの。

正直、お義父様一人の信用と才覚でやっていたような商売だったから、お父様亡き今そのまま無くなりそうな勢いだったけど、それでも遺産はあつたし美人で勝ち気で機転の利くお母様だったから、あつと言う間にコツを掴んで商売を立て直していったわ。

母様は拳を握りしめてこう叫んだの。

「もう男はこりごり！ 誰かに幸せを依存するくらいなら、自分の手で掴み取った方がマシよ！」

私は拍手喝采で絶賛した。だってお母様って、どう考えても男運悪そうなもの。

才気があるならそれを生かした方が手っ取り早いじゃない？

私だって貧乏はもうまっぴら！

そんな訳で、それからの我が家の家訓は「働かざる者、食うべからず」。

お母様は営業や接客を、数字に強いリリア姉様は経理を、私は仕入れや制作担当になったって訳。商うのは布やアクセサリー、ドレスや手袋や帽子類、いわゆるファッション関係ね。綺麗なものや可愛いものは好きだから、もう天職よ。

ちなみに血の繋がらない最後の末っ子はどうしたかって？

それが問題だったのよね〜。

何せ生まれた時から何不自由なく育ってきたから、何一つ出来ない役立たずだったのよ。

お茶を淹れるお湯ひとつ沸かせなかったんだから、もう呆れてあいた口が塞がらなかったわ！

信じられない〜〜っ！！

いくら見た目が可愛くても、何にも出来ない能なしじゃ、お嫁に
だっていけないじゃないのっ！

こうして私の義理の妹への家事特訓が始まったってわけ。
せめて家の中の事くらいやってもらわなくちゃね。
と言ってもそう簡単にはいかなかったんだけど。

あーあ、先が思いやられるわ……。

特訓開始！

「掃除は上からしなさい！ モップをかけてからはたきを使ったら埃が落ちるじゃない！」

「大根の皮を捨てないで！ 皮だってきんぴらにしたら美味しいんだから！」

「色物と白いものを一緒に洗濯してどうするの！ 色移りしたら大変じゃない！！！」

「ごめんなさい、私……」

怒鳴り続けて肩で息をする私に、義妹であるアンジェリカは涙ぐむ。

分かってるわ。悪い子じゃないのよ。ただなーんにも出来ないだけ。

でも、今、屋敷に使用人はいない。母様が経費削減でみんな解雇しちゃったからね。

よって、只今我が家の家事は、私と彼女にかかっている。

……ん、だ、け、ど！

「あの、ミシエル、お、ね……」

「いいわよ、言いくかつたらミシエルって呼び捨てで。どうせ歳だって大して変わらないんだし」

何故か私を呼ぼうとするとつかえるアンジェに、私はため息を付きながら言った。

リリア姉様は普通に呼べるのに、変な子。

「ごめんなさい、ミシエル。あの、私頑張るから！ だから……」

「はいはい。これくらいじゃめげたりしないわよ。言っとくけど！私は仕事もあるんだから、あんたに覚えて貰わなきゃしょうがないんだからね！？」

アンジエは白い指先で涙を拭くと、大真面目な顔で深く頷いた。

「もう一度、お願いします！」

「じゃあいくわよ！ 雑巾の絞り方——」

本当に、見た目と性格は良いんだけどねえ…。

慣れない家事作業によるけている妹を見て、今更ながらふと思いつく。

「アンジエ。家事にそのドレスは動き辛いんじゃないかしら」

「え？」

動きやすい格好を要求したから、持つてる中では一番地味なドレスを着てきたんでしょうけど、どう見てもリボンやフリルが多すぎる。

それでも器用な達人なら、作業の格好は選ばないんでしょうけど、この子は何分素人^{なにぶん}だ。

「ごめんなさい。これが一番地味な服だったんだけど…」

自分の恰好を見下ろしながら、アンジエは申し訳なさそうに呟いた。なるほどお嬢様は質素な普段着なんて持ってない訳だ。

「えーと、確か私の部屋に…」

アンジエの手を引いて自分の部屋へ向かった。

衣装箱の中には、私が昔来ていた粗末な服が入ってる。大柄で背の高い私と違って、アンジエは小柄だから…

色々引っ掻き回して昔の服を取り出した。

汚れの目立たないグレーのワンピース。袖も膨らんでないし、スカートにひだもない、最低限の布の量。ウエストが多少緩いけど、

エプロンを絞めちゃえば問題ないだろう。

多少継ぎは当たってるけど、ちゃんと洗濯はしてあるし動きやすい筈だ。

それでもスカートの裾が長そうだったので、ハサミで切って縫い上げた。

ざくざくとリフォームしていく私を、アンジエはポカンを見ている。

「はい。こっちの方が動きやすいし汚れても気にならないわ。着替えなさい」

胸元に放り投げられて、アンジエは地味―な服を握りしめると、俯いて何も言わずに走り去った。

…あー、お嬢様にはあんな服、屈辱的だったかしらねえ。

でもあんな不器用な動きであんな高級なドレスに染みやカギザギを作るのを見るのは、とてもじゃないけど耐えられない。

そもそも私だって着てたんだし…

どうしたものか考えてると、いつの間にか着替えてきたアンジエが頬を染めて訊いてきた。

「どうかしら？ おかしくない？」

腕を広げてくるりと回って見せる。やだ可憐。

「ええ。ちゃんと着れてるわよ」

さすが美少女。あんなにぼろい服なのに、この子が着ると清楚に見えちゃう。

「ありがとう、ミシエル！ こんな動きやすい服、初めてよ！」

嫌がってたんじゃないく、喜んでたらしい。つまり急いで自分の部屋で着替えたわけね。

予想もしなかった満開の笑みを浮かべる彼女に、胸の奥がきゅんと鳴った。

……きゅん？

…ちよつと待つて！ 何よ今の！

この子は妹よ！？

そりゃあ昔から綺麗なものや可愛いものは大好きだけど！

こんな風に胸が苦しくなるのっておかしくない？

そんな自分が信じられなくて、つい尖った声が出ちゃった。

「良かったわね。動きやすいならとつと働けば？」

「ええ！」

私のきつい言葉を気にもせず、アンジェは小鳥の様に軽い動きで身を翻らせる。

と思つたら、目の前でバランスを崩して転んだ。

しかも顔から。ずべつと思ひ切りよく！

「おバカ！ 何やってんのよ！？」

思わず駆け寄ると、アンジェは美少女にあるまじき鼻血を足らしながら身を起こした。

「も〜、信じらんないっ！」

美少女なのに！ 美少女なのに！

助け起こして、ハンカチで顔を拭いてやる。

「ありがとう、ミシエル。でもごめんなさい、ハンカチが…」

「いいわよ！ でも足元には気を付けて歩きなさい」

私の怒鳴り声を聞いて、彼女のぱっちりした目にみるみる涙が盛り上がる。

「何よ！ 当たり前の事を言っただけでしょ！？」

彼女の真珠みたいな涙に動揺した私は、更に早口で乱暴な口調になった。いやあん、泣かないでよ！

「違っの！ ミシエルが今言った事、お父様にもよく言われてたから思い出しちゃって…」

アンジエはそう言うのと涙を浮かべながら無理やり笑おうとする。

やだ、忘れてた。

この子は父親を亡くしたばかりだったのよね。

私は実の父親が嫌いだったから、奴が死んでも悲しくも寂しくもなかったけど、この子は違う。

優しい父親に愛されて育ったのだ。

その死はどんなに辛く悲しいだろう。

なのに、今まで必死に隠そうとしてたんだ。新生活に向かって奮起する私達に、水を差したくなかったんだろう。

そう思ったら、思わずアンジエを抱き締めていた。

「ミシエル…？」

「大丈夫よ。お父様が亡くなっても、あなたには私達がいる。あなたを一人にはしないわ」

耳元で囁く声に、アンジエはずっと我慢していたのだろう、啜り泣きを漏らし始めた。

私の腕の中にすっぽりと入ってしまう少女は、温かく柔らかい。

震える華奢な肩がいじらしかった。

この先、何があっても私がこの子を守ってみせる。

そう思ったらまた胸の奥がきゅんきゅん鳴った。切なくて苦しい。

………きゅんきゅん？

やだ、嘘オ！？

そんな自分の反応が信じられなくて、反射的に彼女を突き飛ばす。

「ミシエル…？」

「はい、泣くのはここまで！ さっさと掃除を終わらせて洗濯と食事の用意よ！」

アンジエは私に突き飛ばされても嫌な顔一つせず、涙を吹きなが

ら「はい」と元気よく返事した。

自分の中の動揺を必死で押し隠しながら、私はアンジェを連れて再び掃除の仕方を教え始めた。

少し泣いたらすすきりしたのか、アンジェもさっきよりはよろけずに働き出す。

いやーん、私ったらどうしたって言うの？

考えちゃダメ。今は考えちゃダメ。

可愛いけど。すっごく可愛いけど。

この子は義理とは言え妹だしもんのすごい役立たずなんだから！
もう一回柔かい体を抱きしめたいなんて、思っちゃダメだってば！

胸の中に葛藤を抱えてた私が、ついつい妹に厳しく指導しちゃったのは、だからしょうがないわよね？

接触事故？

「あー、つつかれた！ 全くあのエロ爺い！ 人の胸元ばっか見やがって！ ちよつと！？ お茶の用意はできてるんでしょね！？」

荒々しい声を上げてお母様が帰ってきた。その後ろから大きな鞆を持った無言のリリア姉様。

二人の様子からすると、今日の商談相手は愉快的な相手じゃなかったみたい（もつともリリア姉様はいつだって無口なだけだ）。

これ以上二人の機嫌を損ねない様に、私は素早くお茶の給仕を始める。

と言うのに、差し出された薄い白磁のティーカップに目を落とすと、お母様は眉を吊り上げた。

「アンジエね」

「あ、あの、お母様、今日はたまたま野良猫が台所に…」
取り繕おうとする私を、鋭い声が遮った。

「アンジエ！ 出てらっしゃい！ お出迎えも出来ないの！？」
屋敷中に響き渡る様な怒鳴り声に、アンジエが台所から続くドアを開けて現れた。

「お帰りなさいませ。お母様、リリア姉様」

蚊の泣く様な細かい声で、アンジエは深々と頭を下げる。

「ねえ、アンジエ。私のお気に入りの青いティーカップを知らない？」

お母様の含みがある低い猫なで声に、びっくりと肩を震わせてアンジエの顔が青ざめた。

お母様も分かってるくせに人が悪いわ〜。

「ごめんなさい、お母様。実は今日、洗ってる時に落としてしまつて……」

「まあ、何て事！ あれは私が伯爵家に嫁いだ時に実家から持ってきた、由緒正しい品なのよ！？」

激しい叱責を受けて、アンジェの小さな体はぶるぶると大きく震え出した。

「ちよつと待つて、お母様！ 由緒正しいカップつたつて、もういい加減古ぼけてたじゃない！ この子だつて一生懸命やつてるんだし！」

間に割り込んだ私を、お母様は三白眼で睨み付ける。

「良い事、ミシエル？ いくら一生懸命と言つたつて、今月に入つてこの子が割つた皿や食器の数が幾つになると思つてるの！」

「あ、えーと、……五つ、位かしら……？」

冷や汗を流しながら愛想笑いを浮かべて答える私の横で、リリア姉様が「18」とボソリ呟いた。

ああーん、リリア姉様のいけず……！ そんな正確な数字、言う事ないじゃない！

当然お母様の機嫌が最低値まで落ちまくつたわ。

「——ねえ、アンジェ？ あなたがいかに贅沢な暮らしを許されていたかは知らないけれど、それでもそれはあなたが物を粗雑に扱つていい言い訳にはならないのよ？」

出た！ 冷淡毒舌嫌味の三段重ね！ 相変わらず決る角度が尖つてる！

「はい、ごめんなさい、お母様……」

対するアンジェと言えば、塩を降つた青菜みたいに萎れている。大きな目にはとつくに涙が浮かんでいた。

「お母様！ アンジェが粗雑つてのは誤解よ！ この子は先天的にどうしようもなく不器用なだけ！ だつてただ歩いてたつて何もないところで転ぶのよ！？」

「あ、ミシエルが止めさした」

リリア姉様の声に振り返ってみれば、只でさえ小柄なアンジェが縮みまくっていた。身体中が震えているのは、嗚咽が止まらなくなっただろう。

「と、とにかく！ 悪気があってドジな訳じゃないって言うか……」

しどろもどろになりながらも必死でフォローしようとする私を、お母様が冷たい視線だけで黙らせる。おっそろしいのよ、これが。

「悪気がなければ何でも許されるわけじゃないわ。それを言ったらあんたのお父様だって、あんたを殴った事に悪気はなかったのよ？」

「……」

痛いところを突かれてぐうの音も出やしない。

ちくしょく、今思い出しても腹立つわ、あのくそ親父！

でも今はあのロクデナシの話じゃない。あいつとアンジェは違うもの！

何とか反駁しようとしている間に、お母様はとつと話をまとめ始めてしまった。

「そんなわけでアンジェ。損害にはそれなりの賠償が必要だわ。分かるわね？」

食器が割れたくらいで損害賠償だなんて大げさな。見ればアンジェもどう答えてよいか分からずぱかんとしてる。そんな私達をにやにや眺めながら、お母様はこう言った。

「今まであなたが壊した食器や家具、リネン類は、あなたの所持品を売って補填してもらいます。対価計算はリリアに任せるわ。いいわね？」

最後にリリアお姉さまを見ると、姉様は無表情のままこっくり頷く。

「待つて、お母様。そんなのあんまりじゃあ……」

言いかけた私をきっぱり止めたのは、誰であろうアンジェその人だった。

「分かりました。お母様の仰る事はもつともです。私の持ち物で償いが出るのなら、ぜひそうさせて下さい」

お母様はそんなアンジエを見て満足そうに微笑んだ。……地獄の魔女のような唇で。

「分かってくれて嬉しいわ。それじゃあ、私達はもう休むから、補填の品は明日鑑定と言う事でいいわね？」

「はい。よろしく願います」

涙目のまま、それでもアンジエは健気に言い切った。まあね…、それで気が晴れるなら私は別にいいんだけど。

そんな私を見透かすように、お母様はこちらを見て更に楽しそうに微笑む。

「ちなみにミシエル。アンジエの所持品だけで足りなくなったら、残りはあんたの給料から天引きだからね」

「えええっ！！！！！؟؟？」

「当たり前でしょう。あんたの監督不行き届きでもあるんだから」
うそでしょお！？ 勘弁してよ！

今現在、緊縮財政の我が家では、当然お小遣いなんて存在しない。リリア姉様や私は、その働きにおいてお給料制なのだ。とは言え、ここどころアンジエの尻拭いばかりしてたから、仕入れや仕立てが滞って、当然お給料も減っていた（ちなみに歩合制よ！）。

呆然としている私の前を、お母様と、その後についてお姉様が出て行く。

お姉様はリビングの扉を出る直前、私のほうを振り返って独り言のように訊ねた。

「そのアンジエの服…」

「あ、ミシエルが汚してもいいようにって用意してくださって…」
私より先にアンジエが頬を染めながら答えた。

「ふうん…」

「何よ、文句ある？」

ねめつける私に、リリア姉様は意地悪な笑みを浮かべて言った。
「確か…あんたのお気に入りだった服よね。初めて自分で作って…」

「え？」

アンジェが驚いて私を見上げる。

「いいでしょ、別に。どうせもう着れないんだし」

不貞腐れた物言いで目を逸らす私に、リリア姉様はチエシヤ猫みたいに笑った。

「ぎゃー、アンジェったらこっち見ないでよ！ 顔が赤いのがばれるじゃない！！」

「…いいんじゃない？」

人の悪い笑顔でそれだけ言つと、姉様は音もなく出て行く。

リビングには私とアンジェだけが残された。

…気まずい。

別に何が言うわけじゃないんだけど、アンジェがじつと私を見上げるのが何故が落ち着かない気分させられる。

「ミシエル…」

「何よ！」

顔を逸らしてたから、一瞬何が起こったのか分からなかった。

ふわりと細い腕が伸びてきて、彼女の白い手が私の頬に触れる。そのままアンジェは出来る限り背伸びすると、私の頬に口付けた。

「ありがとっ、ミシエル。私、頑張るね」

鳥の雛の産毛に撫でられるような声が耳元を擦る。

柔らかい唇の感触に、頭に血が上り思考が真っ白になって止まった。

思考を取り戻したのはきっかり一分後だった。

「あ、当たり前じゃない！ あんたがまたドジしたら、今度は私の

お給料が減るんだから！　今まで以上にびしびしやるからね！」

裏返った声で腕を大きく振り回す私に、アンジェはその名の通り天使のように純粹で曇りのない、綺麗な笑顔を見せた。

「うん」

む、胸が……くるし……くなんか、ないわよ？

ええ、ちょっと油断しただけ。

そもそもほっぺにキスぐらいなんだって言うのよ。家族なんだからそれくらい普通じゃない。

所詮はただの皮膚接触よ。出会い頭の事故みたいなの？

動揺する必要なんかこれっぽっちもないわ！　ええ！　動揺なんてしてませんとも！！！！

そんな私の心中に気付く事無く、アンジェはいつも通りニコニコ笑ってこっちを見ていた。

……………あ……………、まったくもう……………！！

だから美少女って厄介だわ……………。

灰かぶり

その後、アンジエのクローゼットは中身が半分になって、ようやくその減りを減速させ始めた。

もつとも極力壊れないような床磨きやフライパンの手入れ、銀食器を扱わせていた私の機転が利いたと言うのもあるんだけどね。

だからと言って家事効率が上がったかと言うと、力がないのに力仕事だから、通常の作業時間の倍かかって結果はトントンとてここかしら。

まあ、私のお給料天引きは一応免れたわ。胸を撫で下ろしちゃった。

大体アンジエの失敗の結果が私にまで及んだなんて事になったら、あの子の事だもの、涙が噴水みたいに止まらなくなっちゃう。

——もちろんあの子が泣こうが喚こうが私の知った事じゃないけど、…濡れた床掃除なんてごめんだもの。そうでしょ？

大事な壊れやすい食器はしまい終えて、あとは台所の布巾の洗濯と床掃除だけになったので、アンジエに任せて私は自分の仕事に戻った。サテン生地小さなパーティーバッグにスワロフスキーのビーズ刺繍を施す仕事が多かったの。

小さくて引き連れ易い生地だから、正直神経は使うけど、仕上がりが映えるから結構楽しい。

それに花や星をモチーフにした幾何学模様は、自分で言うのも何だけど結構洒落てて素敵だった。

ウチの人気商品の一つなんだから。うふふ。

思わず根を詰めたら夜の12時近くになってビックリ。

あらやだ、四時間以上も一心不乱になってたわけね。どおりで肩ががっちがち。

お茶でも飲んで一息入れようと台所に向かったら、何とまだ灯りが点いている。

やーだ、あの子ったら消し忘れ？

一時間もあれば終わる仕事、まだやってる訳じゃないわよね！？

そおつと台所を覗いたら、暖炉の灰の前でくうくう寝ているアンジェの姿。片手にはネルの布、片手には銀のスプーンが握られている。昼間、結局間に合わなくてやめさせた家事のひとつ。

…あー、それをやっちゃおうとして寝ちゃったわけね。

馬鹿な子ねー。

明日で良いつて言ったのに。

疲れているのか、少し面糞れした白い顔。不器用で、仕事に人の倍の時間がかかるんだから自業自得なんだけど。でも一生懸命で仕事に手を抜かないのはいいところよね。

暖炉の火が温かくてつい無意識に寄っていったらしく、髪の毛に細かい灰がついていた。

まったくもう！　せつかくきれいな金髪、不器用な誰かさんの為に誰が編み込んであげてると思ってるのよ！？　…そりゃあ、柔かい金髪が触り心地良くて、つつい手を出しちゃうつてのもあるんだけど！

伏せられた長い睫毛が湿り気を帯びていた。

——泣いてる？

微かに開いた珊瑚色の唇から、小さな声が漏れる。

「お父様、私…」

それ以上は聞き取れなかった。

灰を被った金髪の義妹をまじまじと見つめる。

まあね、何一つ不自由ない生活からいきなり突き落とされたんだ

もの。辛くないわけないわね。

同情はしないわよ？ 同情なんか絶対しないけど！

マシユマロの様な柔かい頬を、思わず指で突いたら、うんと小さな呻きが漏れた。

やだ、面白い。

可っ愛い~~~~♪

床に膝について距離を縮めたら、思わずその頬に吸い込まれそうになった。

あまりに美味しそうで。

味見しちゃダメかしら。

ちよつとくらいならいいわよね？

起こさないように、そおつとそおつと近づいた時、背後で意地悪な声がした。

「見ーちゃった」

言葉とは裏腹な抑揚のない声。

リ、リリア姉様！！！！

「い、いつからそこに！？」

台所のダイニングテーブルの向こうで、^{キッチン}コーヒーカップを手にリリア姉様がうふふんと魔女の笑みを浮かべる。ぎゃー、扉の死角になつてたから気付かなかつた！

「初めからいたわよー」

眼鏡越しに細められた目は上弦の三日月。逆に下弦の唇。いかにもにま~~~~つて感じ？

「だったら声かけてよ！」

「最初からアンジェしか目に入ってなかったのはミシエル、あなたの方じゃない」

「そそそそそんな事はっ！」

「大声出したら起きるわよ？」

ちろろんと流し目をくれるリリア姉様の言葉に、ハッと自分の口

を抑える。

「まあ、保護欲をそそるタイプよねえ」

意味ありげな言い方は、相変わらずいけずそのもの。

「何が言いたいの？」

「別に？ あんたはあんたで昔からこつそり怪我した犬猫拾っては世話してたし……いいんじゃないの？」

「そんなんじゃないわよ！」

いいんじゃないの？ って何がよ？

逆に姉様は、昔から難しい本ばかり読んでる子で、何が言いたいのかさっぱりわからない。

「ベッドに運んで寝かせれば？」

「そ、そこまで甘やかす必要ないわ。それにドレスに灰がついちやうし」

「じゃあ言い直してあげる。邪魔だから運んで」

「……………」

その言い方は、有無を言わせぬ妙な迫力を持っていた。この姉に逆らう気？ みたいなオーラがびんびん出ている。幼い頃から刷り込まれた条件反射が、逆らうなと告げていた。

「ね、姉様がそう言うならしょうがないわねっ」

必死で平静を装いながら、私はそつとアンジエを抱き上げた。

うわ、軽い！ もうちょつと食べさせた方がいいかしら。

「言つとくけど、いくら可愛いからって……ベッドでいけない事とかしちやダメよ？」

「するわけないでしょ！ そんなこと」

いけない事っていけない事って、どんな事よ！？

「ま、要は本人にばれなきゃいいんだけど」

「だからしないってば！」

そんな私達をよそに、アンジエは無防備な寝顔を見せたまま、全く目覚めようとしなない。さながら魔法をかけられたお姫様みたいに。

姉様の变化球な舌鋒を必死で避けながら、台所を後にする。

彼女の部屋の小さなベッドにそっとおろすと、灰の付いた髪や頬を、軽く拭いてやった。

だって…美少女なのにもつたないじゃない？ ベッドだって汚したら面倒だし。

後はしっかり布団でくるんでやる。

出ているのはさながら天使の様な寝顔だけ。

苦しくないようにあけたシャツの胸元なんて、見てないわ。

そもそもこの子の貧相な胸なんて、見たってしょうがないし！

脳裏を横切ったあんな事やこんな事をきっぱり振り切って、魔法の呪文を繰り返す。

心頭滅却心頭滅却心頭滅却心頭滅却心頭滅却心頭滅却…

よし、大きく深呼吸！

「ゆっくりおやすみなさい。いい夢をね、アンジェリカ」

閉じたまぶたに軽く口付け（妹なんだから、これくらいはいいわよね？）、まるで本物の姉の様に呟いて、私は彼女の部屋の扉をそっと閉めた。

…つまり、台所の灰の始末や火を落とすのは私って事ね。

あーあ、とんだ貧乏くじだわ。

ふん！

南瓜畑でつかまえて

翌朝、しかもまだ、小鳥が鳴き始めた早朝の事だったわ。

あの脳味噌に綿菓子^{アンジェ}が詰まっている（役立たずって意味よ。結局あの後私が全部片づけたんだから！）、義妹^{アンジェ}が駆け込んできたのは

「ミシエル！ 大変よ！ この間種を撒いた畑に…」

「何よお、こんな朝早くから…畑がどうしたってのよ…」

昨夜遅かった上に朝寝起きの悪い私は、このお馬鹿天使の一言で一気に覚醒したの。

「畑に南瓜が生ってるの！」

……。

「だから何だつてのよ！ 南瓜を植えたんだから当たり前でしょ！
？ 薔薇でも咲いたら驚きなさいよ！」

一気に血圧を上げた私を前に、綿菓子アンジェは冗談じゃなく驚いてみせる。

「ミシエル、知ってたの？」

「だから何がよ！？ 畑に南瓜の種を撒いたのは私だもの。当然実が生ると知ってたわよ」

少しでも家計の足しにしようかと、できるだけ手間がかからず実生のなりやすい野菜を植えたのだ。

南瓜だったら保存も聞くと、何より美容にもいいしね。ローカロリーでカロテンが豊富って素敵じゃない？

だけど、一緒に受粉を手伝っていたはずなのに、何をそんなに驚かなきゃいけないのよオ。

「私…畑ってお花畑の事かと思ってた。野菜も畑に生るのね」

ちよつと待て！　つまりあんたにとって畑はイコール花壇って事？　そりゃあ確かにあんたの家の庭は花壇しかなかったけど！

世紀の大発見の様に言うから、私はますます脱力してしまう。

「あんだねえ、…野菜はどこでできると思ってたの？」

何のてらいもなく義妹は答える。

「八百屋さんが持つてくるものだとばかり…」

「わかったわ、あんだの頭の中身は綿菓子じゃなくてお花畑だったのね」

私の嫌味になんか気付きもしなかったのか（なんせ脳味噌がお花でできてるからね）、アンジェはますます興奮し、輝き溢れる笑顔でこう言ったのだ。

「ミシエル！　私がどんなに嬉しいか分かる？　ずうつとお父様に『お前は体が弱いんだから、何もしないでいいんだよ』って言われたのに、今は少しずつだけど色々な事が出来るようになったわ。しかも南瓜が畑でできるところも見られるようになったのよ？」

そんな彼女の笑顔に、ようやく私は思い当たる。

もしかしたらこの子…、何もできないんじゃない。何もやらせてもらえなかったんじゃないのかしら。

綺麗で手のかからない、お人形の様な娘。

穢れなく従順で、自分がいないと生きていけない様な、いたいけな生き物。

それって…父親や男と言う人種からしてみれば、最高の愛玩物なんじゃないかしら。

亡くなった義父にそんな意識や自覚があったかどうかは分からない。

でもこの子を見ていれば、彼が娘を目の中に入れても痛くないほど可愛がっていたのは一目瞭然だ。

母親も早く亡くなったと聞いてるし、経済力は充分。

閉じられた空間で、愛情と言う名の綿に閉じ込められる構図が簡単に浮かぶ。イメージ

この子自身、素直で優しい子だからそんな状況に疑問を抱く事はなかったんだろうけど、心の底では本当は色んな事がやってみたかったんじゃないのかしら。

その証拠に…今思い返してみれば、失敗は数々あれど、この子がお母様の怒鳴り声やお姉様の嫌味に、口答えしたこともなければ泣き喚いたこともない。泣きそうになった事は何度かあるけど、自分の非力を嘆くだけで家事労働自体を嫌がった事は一度もないのだ。むしろ失敗し続けてもめげないその根性は、ちょっと見上げたものかもしれない。

「アンジエ、楽しい？」

「ええ！」

屈託のない笑顔で彼女は頷いた。

その途端、最近感じていなかった胸の痛みがずくんと締め付ける。

「そう、よかったわね」

「ありがとう！ それもこれもミシエルのおかげだわ！」

はしゃぐ彼女を見て胸の痛みはますます激しくなった。

「当たり前でしょ！ あんたがさつさと一人前になってくれなきゃ、こっちはずっと尻拭いなんだから！」

「それにももちろん感謝してるんだけど…私、ミシエルの事本当に尊敬しているの。色んな事を知って、どんな事もできて、おまけにミシエルの手は夢の様にきれいなものをあつという間に作り出さるんだもの！」

「…！」

きらきらと光る瞳が、憧憬を溢れさせて私をみつめる。

「やだ、何言ってるのよ。お裁縫はともかく、家事なんて誰だってできるわよ。あんたができなさすぎるだけ」

「そうよね。もっと頑張らなくっちゃ」

恥ずかしそうにほほを染める彼女に、朝日があたって眩しかった。辺りでは目覚めた小鳥たちが、餌となる落ち穂を求めて飛び回っている。

「でも…ミシエルの指は魔法の指よ。美味しいものが作れて、部屋中をピカピカにできて、汚れた布だって綺麗に洗い上げて…それ以上、あんなに美しいものがたくさん作れるんだもの」

一点の穢れもない純粋な好意が、私の胸を締め付ける。

ねえ、私たちは何をやってるのかしら。

朝っぱらから、こんな南瓜畑の真ん中で。

そして私は何をしようとしているのかしら。

こんな南瓜畑の真ん中で。

気が付けば、私はアンジエを抱きしめていた。

「ミシエル…？」

「お願いだからしばらくこのままでいさせて。…あんたがあんまりバカな事ばっか言うから…力が抜けて立ってられないのよ」

「…うん」

私より頭一つ小さなアンジエの小さい体は、私の腕の中にすっぽり包み込まれる。

そのたまらない柔らかさに、さっきの父親への推測がほぼ当たっているだろう事を確信してしまう。

だって…こんなにふわふわで愛しい生き物がいたら、そりゃあ閉じ込めておきたくもなるでしょうよ。

今なら彼の死因が娘への偏愛だったとしても驚かない。

だって…心臓だって、この子に会ってから変な動きをしっ放しな

んだもの――

「ミシエル、苦しい…」

私の腕の中で、申し訳なさそうにアンジェが呟く。

「あんたが小っちゃいのが悪いのよ。でもそろそろ帰ってお茶にしましょうか。お茶くらいはまともに淹れられるようになったんですよ？」

「ええ！」

嬉しそうに腕の中の天使が笑うから、私の頬もつい緩む。

「じゃあ、お願い。ただしティーセットは普段使用の丈夫なやつよ？」

「わかったわ」

厳かな表情で、あまりに真剣にアンジェが答えるから、私はつい吹き出してしまった。

その意味に気付きもしないのか、アンジェはきょとんどこちらを見上げている。

「今度、他の野菜も植えましょうね。簡単でたくさん生るやつ」

「本当？」

「ちゃんと手伝うのよ？」

「ええ！」

そんな風に、私達は肩を並べながら屋敷へと戻った。

そして私は諦めの境地に達する。

何度もそんな筈ないって思ったけど。

この子は義妹だと言い聞かせてきたけど。

役立たずで能無しで根性しかない、バカみたいに純粋な、無駄にキラキラの天然美少女だけど…

――私はこの子が好きなんだ。

Shall We Dance?

「舞踏会？」

「んっふっふ、そうよあ、ほら！」

ディナーの食卓で、空豆のスープを前に、お母様は一通の封筒を取り出した。

封蝋には鹿と剣を象った王家紋章。ロイヤルエンブレム わお、マジ？

「王宮主催の晩餐会？ よく手にはいったわねえ」

私の向かいでリリア姉様が赤ワインを傾けながら呟く。

「その辺はね、元伯爵家だもの。ツテを使いまくって手繰り寄せたわよ」

前菜の新玉葱とビーツのマリネをつつきながら、お母様は上機嫌な事この上ない。

私達が遺産を元手にファッショ^{セールス}ン関係の商売に乗り出して早2年、お母様の人脈を駆使した商才とリリア姉様の手堅い運営で、商売はそこそこ順調にいつていた。もちろん、仕入れや制作担当の私の腕^{センス}の賜物でもあるんだけどね！

でもそりゃあね、王宮出入りになったら商売の格も上がるし、儲けだつて半端じゃなく上がるだろう。

私とは言えば、王宮で目にするだろう最高級のドレスやアクセサリーを思い浮かべてうつとりしていた。

リリア姉様も儲けの算段を考えているのだろう。王侯貴族なら何掛けまでふっかけられるかしら、とか何とか、脳みそ駄々漏れで唇の端がひくひくしている。いやあん、楽しそうなりリア姉様ってちよつと怖い。

「そんな訳でリリア、ミシエル、金曜日までに、宣伝を兼ねた最高級の支度を用意しておくのよ！」

高らかに宣言したお母様の声が耳の奥で反響して、ふと気付く。

「…お母様、アンジェは？」

血の繋がらない娘だし商売にノータッチとは言え、もう2年も一緒に暮らしてるんだもの、一人だけ除け者は可哀想じゃない？

「私がなあに？」

台所からメインディッシュのポットローストを運んできた当のアンジェが、自分の名前を呼ばれてきょとんとしている。

…はっ！ ポットローストは落とさなかったわね。セーフ…！
アンジェったらずぐ何かに驚いてものを落とすから、ついヒヤヒヤしちゃった。

「舞踏会の招待状よ。せつかく手に入れたんだけど、生憎3人分しかないの。アンジェリカ、あんたはお留守番よ」

私の緊張緩和になど目もくれず、お母様はあっさりと言い捨てる。
「そんなひどいわ！ アンジェだけ行けないなんて」

膝のナプキンをテーブルに投げ出して立ち上がった私に、お母様は冷たい視線を投げ掛けた。

「仕方ないでしょ。家族とは言え、アンジェは伯爵家の血筋じゃないんだから。それともアンジェを連れて行ってミシエル、あんたが留守番する？」

「ぐ…っ」

王宮の最新ファッションを間近で見られる機会なんて、そうそうない。

ごめんなさい、アンジェ。つい煩惱が勝って声が詰まっちゃった。

そんな私に追い打ちをかける様にお母様は言ったわ。

「それに、万が一王宮でその綿菓子娘アンジェリカが粗相でもしたら、あんたが責任をとってくれるのかしら？」

「…！」

ぐつの音も出ないとはこの事ね（泣）。

「ミシエルったら、気にしないで。これでも一人でお留守番くらいはできるようになったのよ？」

見当違いの言葉を発する義妹に、私は大きくため息をつく。

「そうね、最近はいい物に行ってから財布を忘れたのに気付いたり、晩御飯のおかずの魚を野良猫に取られて裸足で追っかけてるくらいですんでるものね」

「あれは…！」

アンジエは真っ赤になって口ごもる。

「お財布はいつも籠の中にあつたから、掛け取りに来た酒屋さんに支払いで抜いたのを忘れてただけだし、お魚を取られそうになった時はたまたま井戸で洗濯中だったんですもの…」

スカートの裾を捲り上げたまま、裸足で野良猫とサーモンを取り合ってるこの子を見た時には、どこの国の陽気な若奥さんかと思っちゃったわよ！

『お願い返してー』なんて涙浮かべて戦ってた姿はちょっと可愛かったけどね。

野良猫に負けている情けなさもあいまって、しょっぱい笑みが浮かんだものよ。

だーけーどー！

舞踏会よオ？

しかもお城で開催されるやつよ？

贅を尽した装飾や音楽、着飾った人々に供される御馳走やシャンパン、確か我が国の王子さまだって若くてハンサムだったはず！

若い乙女なら誰でも夢見るシチュエーションじゃないの！？

この2年でアンジエの体つきだって多少は凹凸が出てきているし、

社交界デビューにはばっちりじゃない！

「あんただったら、着飾ればどこのお姫様にも負けないくらい綺麗になれるのに……」

それこそ髪形から爪の先まで、徹底的にスタイリングしちゃうのに……っ！……！

「そんな、ミシェルったらお世辞ばかり」

照れたように笑うアンジェは、本当に可憐だった。

これなら金持ちのボンボンの一人や二人、簡単にひっかけられるだろう。玉の輿だって夢じゃない。

そう思うと少し胸が痛むけど。……少しだけね？

「ミシェルだって、着飾ればすぐく素敵よ、きつと！」

一片の疑いもなく私に向けられる視線に、肩が落ちた。

ま、まあね、自分で言うのもなんだけど、私だってそこそこいけてると思うわ。

艶のあるブルネットもつんと尖った真つすぐな鼻梁も、美形のエッセンスとして充分数えられると思う。睫毛だって長いから、流し目だって得意だしね！

ただ……、ごついよ……！

背も高いし肩幅も広い。首も若干（あくまで若干よ！？）太い気がするし。声が低めなのはセクシーでいいかしら、とも思うんだけど……、足がね、でかいのよね。……26センチ？ 引っつも履くものなくて苦労してるんだから！

「あーあ、私もあんたみたいに小柄で華奢だったら何でも似合うのに……」

「あら、私は淡い色しか似合わないもの。ミシェルは原色とかばっちりじゃない」

「まあ、ねえ……」

自分に合う服が売ってなかったから自分で作り始めたと言うのはあるんだけど……。

でもせっかく目の前に何着せても似合う様な子がいるのに、ああ、勿体ない！

ふんわりした生地で円舞曲でも躍らせたら、きっと本物の妖精みたいよね！

「あ、ところで…アンジェはダンス踊れるの？」

「いいえ？」

何の躊躇いもなく、さも当たり前のようにきっぱりと彼女は言い切った。

やっぱし！

小さい頃は体が弱かったって言ってたし、その後ダンスの話なんか聞いた事ないもの！

そう思ったら私の中で野望がむくむくと首をもたげ始める。

「アンジェ、特訓しましょう！！」

「え？」

「だって、いつ舞踏会に行けるようになるか分からないのよ？ その時踊れないまま、王子様の足でも踏んじやったらどうするの！」

有り得る！ 万が一の粗相。

だって、普通に歩いてたって転ぶ子だもの！ 運動神経なんかに等しいんだから、ダンスがうまいとは到底思えない！！

「いいーい！？ あんたが可憐に踊れるようになるまで、私がみつちりしごいてあげるから！」

「え？ え？」

私の迫力に気圧されたのか、アンジェは冷や汗を流しながら及び腰になっている。

でも逃がすつもりは毛頭なかった。

だって、私の脳裏には、私が作った極上のドレスを着たアンジェが、妖精のように舞う姿が焼きついてしまったんだもの！

そりゃあもう、キュートでリリカルで超ハートキャッチなイメージで！！！！

この子は何があっても舞踏会に連れて行ってみせる！

その為にも完璧なダンスを教え込んで見せるわよ……！！！！

瞳の中に闘志と言う炎を燃やし、私達の台所での特訓が新たに始まったのは言うまでもない。

但し。

その後際限なくアンジェに足を踏みつけられて、台所に私の雄叫びが響き続ける事になるとは、この時予想もしていなかったんだけどね

舞踏会への道

「ほら、右足！ 一歩ひいて！ 左足でターン！」

「え？ あ、きゃあ！」

世にも可愛らしい悲鳴を上げて、アンジエは台所の床に倒れこむ。後頭部が床と愛し合う寸前に、私の右腕がキャッチした。

「…んとにもう！ 何度教えれば覚えるのよ！」

私の腰にしがみつきながら、アンジエは小さな声で「ごめんなさい」と囁いた。

どうにもこうにも、この子は足と手をいっぺんに動かす事が出来ないらしい。手の動きがついた途端、足が変なステップを踏み始めるのだ。

「こんなんじゃ、いつまで経っても舞踏会に行けないじゃない！」

「ミシエル、私、別に舞踏会には…」

「バカな事言わないで！」

アンジエを睨み付ける瞳は、我ながら鬼の様に恐ろしかったと思う。

だってね！ 本当にステキだったんだから！

ピッカピカに磨きこまれた大理石のホールで着飾った紳士淑女が華麗に舞い踊るその豪華絢爛な事と言ったら！

効果的に配置されたシャンデリアや蠟燭の明かりが幻想的な雰囲気醸し出し、一流の楽士達の音楽は、踊る人々を夢の世界に誘う

「…そして貴婦人達の髪や耳たぶ、首筋で翻る羽根やリボンや宝石達と言ったら！ あれを夢見ずして何が乙女！？」

鼻息荒く、拳を握って熱弁を振るう私に、アンジエは床にしゃがみこんだまま、クスクス笑った。

「何よ…！ 何かおかしい！？」

思わず熱くなっていた自分を自覚し、急に決まりが悪くなる。

「うっん。ミシェルが嬉しそうだから、私も嬉しい」

……待つて。

今の笑顔は反則だわ。

そんなキラキラした笑顔を向けられたら、裏に隠している下心が居たたまれないじゃない！

確かに舞踏会はステキなの。

今まで3回行ったけど、どれも趣向を凝らしてあつてすごく感激しちゃった。

でもでもでも！

私が一番夢見てるのは……、着飾ったアンジェをあのホテルの真ん中で踊らせる事なのよ！

私が作った極上のドレスを着て、結い上げた髪に花を挿して舞うアンジェは、きっと空気の精アリエルか、その名の通り天使さながらに違うない。

じ・つ・は！

いつ招待されても良い様に、ドレスだってこっそり鋭意制作中なんだから！

奮発した生地は淡いピンクのシルクシフォン。これだけ密着して踊ってれば、サイズだってほぼばっちりよ。

はうあ~~~~、見てみたいわ、私のドレスで踊る可憐なアンジェの姿を！

この両の眼でしっかりと！

なーのーにー！ー！ー！！！！

「何であんたは肝心のダンスが踊れないのよう!!!」

妄想で暴走した乙女脳をきっちり軌道修正した私に、がっちり肩を掴まれたアンジエは、逃げる事も出来ずに「ごめんなさい〜」と泣きべそになっている。

は〜〜〜……。

泣かないでよ、まるで私が苛めてるみたいじゃない!

いっそ、あの華麗な舞踏会を生で見られれば、無欲なこの子も一念発起してやる気を出すんじゃないかしら。

えーと、例えば踊らなくてもいい、シチエーションで。

……。

「ミシエル?」

「あんたは黙ってて!」

「はい!」

…そうだ! いい方法思いついちゃった!

「侍女として?」

胡乱な目つきで私を見ると、お母様は私が言った言葉を反語で繰り返した。

「ええ、そう! だってお付きの侍女を連れて行くのは当たり前的事だし、それなら招待状は必要ないわ。アンジエだって控えの間で待つてる間、おとなしく座っていればいいんだもの。そうそう粗相なんてしないだろうし」

我ながらナイスアイディアよね。

アンジエを侍女の格好をさせてお城に連れて行く。

もちろんダンスホールには入れないけど、雰囲気は垣間見る事くらいは出来るはず。

華やかな空気を感じさせて、自分も行きたいって思わせるの。

「ん〜、でも…」

「何か問題があつて？ お母様」

「だって… 本当の事がばれたら、私は継子を苛めてるみたいな印象になっちゃうじゃない。それってイメージリスクが高いわよ」

苛めてるみたいになって、実際苛めてるくせにイ……。

「だからね、この子には口が利けない事にして、一切喋らせなければいいわ。そうしたらこの子が実はうちの継子だなんて、誰も気が付きやしないわよ。黙ってれば誰も騙した事にはならないし」

「でも……」

尚も洩るお母様に、私は取っておきの呪文を唱える。

「例えば… この子に素敵なメイド服を着せておくの。そうしたら、それを見た貴族の皆さんから、メイド服の発注も来たりするんじゃないかしら」

私の言葉に、お母様の眉がぴくりと反応した。

「やっぱね、お金儲けって大事だもんね。発注って、お母様の大好きな単語のひとつよ。」

「… 悪くないわね」

「でっしょお!？」

「でもミシエル、そんなメイド服なんか作れるの?」

「まっかせて! 必要とあればどんなものだって作って見せるわ!」
両手を高く上げて強気で言い切った私に、お母様は面白そうに頷いた。

「いいわ。そのメイド服の出来次第で考えましょう」

「やったあ! これで一緒に舞踏会へ行けるわよ!!!」

「ミシエル、これ……」

アンジェが着せられた服を見て、目を丸くしている。

只でさえおニューの服なんて久しぶりだというのに、ばっちり膨らんだ白いカフス付きの袖と長めのスカートにフリルもたっぷり。

襟元は清楚に白いスタンドカラーで詰まらせて。

もちろん、ホワイトブリムのカチューシャだってお揃いで作ったわ。

地味な黒いドレスに白いエプロンは定番だけど、それでも上品さを醸し出せるように良い生地を使って苦労したんだから！ エプロンの胸元のフリルと、タックとリボンのバランスは完璧よ！

いやーん、我ながらなんて可愛いデザインなの！！

言っていい？ 言っていい？

私って天・才！

「どう？ 気に入った？」

「うん、すっごく可愛い」

花の様に顔を綻ばせながら、アンジェはくるりと回って見せてくれる。

…やばい。やばいわ。

「あのね、アンジェ？」

「なあに？」

「…試しに『ご主人様』って言うてみてくれる？」

「え？ えーと、…何か御用ですか？ ご主人様」

芝居の練習だと思ったらしく、はにかみながら微笑むアンジェ。

………心臓が！

止まるかと思った！ 鼻血吹く！

可愛すぎる！ どうしよう、超可愛い可愛い~~~~！！
膝に乗せて舐めるように撫でまわしたい衝動に駆られるのを必死で抑えた。

だって、アンジエは義妹だもの！ メイドの格好をさせてるだけ！ 本物のメイドじゃないのよ！？

そんな事したらただの変態じゃない！（本物のメイドだってそんな事したら変態だけど！）

ダメよミシエル！ トチ狂っちゃダメ~~~~！！！！

「大丈夫？ なんか苦しそう…」

「へ、平気よ、何でもないわ」

激しい欲望に翻弄される脳を振り切つて、必死で平静を取り戻す。は~~~~、ドレスも良いけど、こんなのも似合うわ。悶えすぎて死にそう。

さすが並の美少女じゃないわね。お願いだからこれ以上私を苦しめないで。

薄い罪悪感に苛まされながら、私は最後の手段を行使する。

「お願い、もう一回、回って見せて」

いつも通りの振りをして、にっこり微笑む私に、「こっつ？」とアンジエは回ろうとした。

——んだけど。

「きゃ！」

つついバランスを崩してこけそうになるのは、もうお約束以外の何ものでもなかったわ。

…ふう、これでやっと平常心に戻る…。

真夜中の庭で

「じゃあね、ちゃんと大人しくしてるのよ!? 知らない人についてっちゃダメよ? あんた見た目は可愛いんだから、浚われないように気をつけて! 飴玉くれるって言ったって、いい人とは限らないんだからね!？」

「ミシエル、アンジエだって子供じゃないんだから…」

リリア姉様が呆れた声を出したけど、そんなの一切耳に入らなかった。

馬車は既に王宮に到着し、私達はホールに出る前の最終チェックをする控えの間に来ていた。一応小さいながらもちゃんと個室になっている。

そしてアンジエは、私達が出て行ったらここに独りぼっちになっちゃうのだ。

大丈夫かしら、大丈夫かしら。

だって、よく考えたらこんな風にこの子を慣れない場所に置き去りにするのなんて、初めてだったんだもの。

ほとんど家から出る事無く、出るとしても大抵私と一緒に畑に行くか買い物に行くくらい。

雛を置き去りにする親鳥の様に、私は心配で心配でたまらなくなっちゃったの。

どうしよう、自分で思いついておきながらこんな気持ちになるなんて。

「ミシエル、私は大丈夫。何かあったら外に立っている侍従さんに筆談で頼めばいいんだし、隣の広間に行ったら他の侍女さんたちもたくさんいるし…何か聞かれたらちゃんと口が利けないふりをするわ。大人しくしているから、ゆっくり舞踏会を楽しんできて」

「でもオ…」

尚も不安を隠せない私を、お母様とリリア姉様が苛付いた様にせつつく。

「言つとくけど！ 遊びに来ているんじゃないのよ！？ あんただってその辺解つてるんでしょ？ ミシエル」

お母様の蛇の様な目が絡みついて、見えない鎖が私を縛り上げる。わかつてるわよ。母様や姉様は商売の宣伝のため、私は王宮の最新ファッショントレンドをチェックするのが大切な仕事。でも――

――
そんな私にとどめを刺すように、リリア姉様が言ったわ。

「多少は迷子にでもなつてた方が、そのメイド服が宣伝になっていかもよ？」

うわぁん、姉様の意地悪！ オニアクマ！！

目の前ではむしゃぶりつきたくなるほど可愛らしいメイド姿のアンジェが、私を安心させようとにこにこ微笑んでいる。

だーかーらー、その笑顔が危ないのんだってば！！

その笑顔に引き込まれて悪さをしようなんて輩がいなくても限らないんだから！

「いい加減にしなさい！！ たった数時間の事でしょ？ 今生の別れじゃあるまいし！」

とうとうお母様の雷が落ちて、私は後ろ髪をぐいぐい引かれながら渋々泣く泣く王宮の控えの間を後にした。

…もちろん。

あのとろいアンジェが、大人しく何の問題も起こさずに済むわけなんかなかったのよ……

舞踏会も半ばを過ぎて、宴たけなわもいい頃、私はどうしても不安が拭いきれなくてアンジェの様子を見に行くことにした。

まあ、かなり場も碎けてきてるから、うまくすれば舞踏会の様子をそつと見せる事もできるしね。

でも控えの間にアンジェはいなかった。

…トイレかしら？

そう思っただけで、あのこは一向に戻ってくる気配がない。

外のいた侍従や衛兵に聞いてみると、しばらく前に部屋を出て行ったと言う。

……。

十中八九、迷子になったわね。

ええ、まず間違いなく。

町に買い物に行ったときだって、ちょっと目を離すとすぐあらぬ方向に歩いて行っていたアンジェ。

店から出ただけで、家に帰ろうとしながら全然違う方向に行こうとしていた、超々弩級の方角音痴なんだから！

…いいわ、落ち着いて。

まずは可能性としてトイレよね。

口が利けない設定なんだから、外の人に用がある筈はないし、簡単なお茶セットなら部屋にも用意されている。

ええ、いいわ。まずはトイレに行ってみましょう。

廊下をまっすぐ進んでから左に折れると、そこが化粧室だった。

中が無人なのを確かめてから、その入り口を背に、来たのと反対方向に進む。突き当りの左側は厨房だったから、右へ進むと中庭に出た。

うん、たぶん、こっち。

なんかおかしい場所に出た事に不安になりながら、音楽の聴こえる方へ庭を突っ切ろうとしたのかも。

まったく変なところ怖いもの知らずだし。

ちよっとした迷路の様になっている、植込みの通路をそつと進む。あと一つ角を曲がれば拓ける場所に出ると言うその時、聞こえてきたのは若い男の声だった。

「こんなところで君みたいな人に会えるなんてね」

どこかはしゃいだその声は、それでも十分気品に溢れていた。広間で聞いた事のある、この声は――

その時小さな悲鳴が聞こえて、私は思わず飛び出した。

見れば転びかけたメイド姿のアンジェと、それを支えようとしている男性の姿。

「この子にさわらないで！」

アンジェを背に庇い、咄嗟に叫んでしまったのは失態としか言いようがない。

だって、どう見たって彼はアンジェを助けようとしてくれていたんだもの。

しかももしかも何て事！！ 世継ぎの第一王子、トーマス・シャノン皇太子殿下！

当の殿下も、突然二人の間に割り込んだ私に、びっくりした顔をしている。

「ミシエル……！」

私の後ろでアンジェが小さく声をあげた。

「……なんだ、ちゃんと口が利けたんだね」

「あ……」

苦笑する王子様と、私の後ろで口を抑えるアンジェの気配。

どうしよう。どうやってこの場を取り繕おう。別段怒ってる様子はないけれど、私のした事は不敬罪もいいとこだ。

「失礼いたしました、殿下。薄い月明かりにて咄嗟に殿下と気付きませんでした」

精一杯殊勝な声で、腰を落として跪く。

「良い。退屈な宴を逃げ出して隠れていたなら、可愛い妖精を見つけ
て大喜びしていたところだ」

「寛大なお言葉、感謝いたします」

「そなたは——？」

「ハルログ家のミシエル・ヴィータと申します」

「ふうん、じゃあ君の家の侍女なのかな、彼女は」

「この子は——」

なんて言おう。正直に言うべき？　だって見た通りのメイドだつて言ったら、今後舞踏会には賓客として呼ばれなくなっちゃうかも……言葉に迷う私の後ろで、冴え冴えとした月光の様な声がした。

「わたくしの妹達が何か？」

「リリア姉様！」

いつからそこにいたのか、無表情な仮面を張り付けたリリア姉様が、私達から少し離れたところに立っている。

けれど一番驚いた様子を見せたのは、何を隠そうトーマス殿下その人だった。

「君は……リリア・ドルチェリカ……！」

ええ！？　トーマス殿下だったらリリア姉様を知ってるの！？

「覚えていて下さって光栄ですわ、殿下。私の妹達が何か粗相をしてないとよいのですけど」

見事なまでの愛想笑いで、姉様はその場の空気を支配する。

「妹達…？　じゃあ、その侍女姿の少女も…？」

「ええ。母の再婚相手の連れ子ですの。血の繋がりがなく舞踏会に連れて来るわけにはいかなかったのを、ミシエルが憐れんで侍女の姿で連れてきてしまいました」

「と言う事は、この子は伯爵家の血を継いでいない？」

「そう言う事ですわ」

「なるほどね。しかし…」

何か言いかけた殿下の言葉を、半眼開きになった姉様があっさりと遮る。

「…何か？」

「え？」

…気のせいかしら。殿下が青ざめて見えたのは。

「な・に・か？」

一語一語区切る様な姉様の声は、何も聞くなと言外に語っていた。ええ、そりゃあもう雄弁に。

とは言え相手は王子様なのに、姉様ったらなんでそんなに強気でいられるの…？

姉様の迫力に負けたのか、「いや何でも…」と殿下は言葉を濁してその場を立ち去った。

姿を消す直前、アンジェに向かって唇に人差し指を立てながら鮮やかなウイंकを残して。

振り返れば、アンジェは真つ赤な顔で俯いていた。

…えーと、何か…人に知られたくない話でもしてたのかしら。

「アンジェリカ」

姉様の鋭い声がアンジェに刺さる。

「ごめんなさい、トイレに行ったら迷って戻れなくなって…」

おーまいがつ！　なんて予想通りの子なのよ！！
さめざめと嘆く私とは裏腹に、耳を疑う様な言葉が姉様から漏れる。

「よくやったわ」

「えっ？」

意外な姉様の言葉に、私とアンジェの声が重なった。

「世継ぎの王子とコンタクトできたなんて…最高の展開だね。そう
思わない、ミシエル？」

姉様の妖しくも不敵な笑いに、私の背筋には否が応にも冷たいものが滑り落ちていた。

嫉妬と反抗期

どうして…あんな事しちゃったのかしら。

頭の中でぐるぐると、自己嫌悪と自己不審とが渦を巻く。

声を聞いた時点で、その場に居るのは皇太子殿下だと分かっていたのに。

逆らっちゃいけない絶対権力。

でも気が付けば体が動いていたのだ。あの——月明かりに照らされた御伽噺の絵本の様な二人を見たくなくて。

王子は砂色の髪と榛色の目をした、いかにも高貴な生まれと分かる洗練された青年だった。アンジエに話しかける声も穏やかで優しいものだった。

彼がアンジエに危害を加える気がないのはすぐに分かったのだ。だけど——

いいわ、認めましょう。

そこにあっただのは嫉妬だった。——言っとくけど、特殊部隊の愛称じゃないわよ？（誰も思わないってそんな事！）

世にも気高き王子様と、身分違いの美しい少女。

そんな二人が、月明かりの裏庭で見つめ合っているのを見たあの瞬間、——私の中で何かが猛烈に燃え上がり、その世界をぶち壊しなくなったのだ。

破壊して粉碎して木端微塵の粉々にしたかった。

それがあの時の行動の理由のすべて。

おかしいわね。我ながら笑っちゃう。

だって、何もなかったのよ？

あの二人の間には、何もなかった。

たまたま偶然出会って、ほんの数刻を共に過ごしていただけ。
しかもアンジェなんか、口さえきいていない。

差し出そうとした手の位置からすると、王子はジェントルにもち
やんと距離をおいていたらしいし。

それなのに……

何かがざわざわと心臓をぐらつかせた。そしてその奥から何かが
噴き出しそうになった。

だって……きれいだっただんですもの。

完璧な一対の様に、二人の世界は出来上がっていた。

まるで幻想画家の絵か、ロマンス小説のワンシーンの様に。

「……シエル……」

だから……我慢できなくなっただ。いつだって、転びそうになる
アンジェを支えていたのは私だった。

それなのに――

「ミシエルったら！」

「え？」

気が付けば鬼の様な形相のリリア姉様が目の前にいた。

「――聞いてた？ 私の話」

「ごめんなさい。ぼーっとしてて……」

「家族会議の最中にぼーっとしてるなんて、いい度胸じゃない」

……え？――あ、きゃ~~~~~！！！！

姉様の背後にはやはり腕組みしたままソファに座る怖い顔をした
お母様、その手前に縮こまっておろおろしているアンジェの姿があ

った。

やば！ 家のリビングで、家族会議と言う名の弾劾裁判の真っ最中だったっけ！

要は、アンジェが王子から個人的に有益な情報を聞いていないか、訊き出そうって言うシチュエーションよ！ 王族、しかも直系とのコンタクトなんてそうそうはないから、我が家の商売にとつてはそれを機に親交を図るチャンスもいいとこなの。

でもアンジェったらさつきから一言も口を利かないのよ。そんなあの子を見てたらつい、自分の考えに耽っちゃった。

「ごめんなさい！ もう大丈夫。お願いだからもう一回プリーズ！」

胸の前に両手を組んで、お祈りのポーズをとる私にリリア姉様は鼻息を荒くして言ったわ。

「だから、ミシェル、あんたもアンジェが王子と何を話したか聞きたいでしょう？——って、言ったの！！！」

「え、あ、その……」

思わずアンジェの方を見たら、あの子ったら涙目で俯いちゃっている。既に散々お母様やお姉様に口を割る様、脅されたり宥められたりしていたのに、怯えた顔をしたまま、未だ何一つ言っていない。

まあ、アンジェの言い分も分からない訳じゃない。

最後に見せたあの王子の仕草。あれは黙っててと言う意味だった。元々アンジェが口が利けないと思ったからこそ吐露した本音もあつたんだろう。

アンジェもそれを分かっているから、迂闊に何も言えない訳だ。

——どんなに責められても、彼の為に。

そんな姿に、私の中のどす黒いものが首をもたげかかっている。

そりゃあ、かつこいい人だったけど。お金も気品も知性も有り余るほど持ってたけど――！

「私も聞きたいわ、アンジェ」

思わず漏らした低い声に、アンジェは信じられぬものを見るような目で私を見た。

私だけは味方だと思っていたのだろう。彼女のそんな表情に、胸がずきんと痛む。

「…ごめんなさい…」

蚊の鳴く様な声で、それでもアンジェはそれしか言わなかった。

「わかったわ、じゃあこうしましょう。アンジェが何も言わない限り、ミシエルのお給料は10%減棒」

「何それえ！？」

お母様の言葉に思わず立ち上がる。

ちよつと待つてよ！ 今月こっそり用意したこの子のドレス代で結構ピンチなのにい！！

慌てふためく私に意地の悪い笑みをを見せて、お母様はこう言った。
「だって…、アンジェは自分が責められ慣れてるから、こうと決めたら絶対曲げないもの。それに、元々アンジェを変装させて王宮に連れて行きたがったのはミシエルでしょ？ ある意味連帯責任だわ」

「そんなぁ……」

お母様の変則攻撃に、アンジェもおろおろしている。本当に、こういう悪知恵だけは魔女みたいに回るんだから！！

とは言え、ここで私がアンジェを責めたらいかにも自分本位よね？ 本当の事が知りたいと言うより、お給料が惜しい事になっちゃう。いや勿論、お給料減棒は困るんだけど！

そおつと窺うようにアンジェを見たら、ばつちり目があっちゃった。あっちゃあ！

「わかりました、言います。でも…くれぐれも口外しないと約束してください」

悲壮な覚悟を漂わせて固い口調になるアンジェに、お母様やリリア姉様は『勿論よ』とでも言う様に大きく肯いた。

…わが母と姉ながら、なんて嘘くさいのかしら…。

でも私自身、アンジェと王子がどんな風に親密だったか、知りたくて堪らなかった。だから何も言わなかったのだ。

「皇太子殿下は…ここ連日続く舞踏会は、花嫁探しの一環なのだと仰いました。決して公にはなっていないけれど、出来るだけ多くの国中の若い女性を集め、殿下に相応しい相手を値踏みするのが目的なのだと——」

あ——…さもありなん。

もっともお母様やお姉様は知ってたみたい。驚く様子は微塵もない。

「それで？ それから彼は何を話したの？」
ずずいと顔を寄せてお母様が先を促す。

「それでその…あの方は…」
アンジェはほとんど俯いて声も小さくなる。

「聞こえないわ、はつきり言って」
姉様の声が鋭くなった。…何か、異様な執念みたいなものを感じるのは気のせいかしら。

「本当は…こんな風に家柄や政治的な背景とは関係なく、心から愛する人を妻に迎えたいのだと仰いました」

……。

「それで？」

「それだけです。その後、私が立ち上がろうとしたらバランスを崩したので、支えようとして下さって……」

「ミシエルが来たわけだ」

「はい……」

……。

リビングに白けた沈黙が流れる。

なあに、それ！？　どんな乙女脳！？　国の世継ぎなら政治的背景のない結婚なんて、砂上の楼閣と自覚認識して然るべきじゃないの！！！！？？？

それともあれかしら。世間知らずなアンジェの気をひこうと言う作戦？

有り得る。有り得るわ。この子ったら疑うって事を知らない子だもの！

案の定アンジェは、同情する目つきになっている。

あつまーっ！！　くそ甘っ！　あるわけないでしょう、そんなの！！

「……わかったわ。何の情報価値もない戯言だったわね。無理に訊き出して悪かったわ。この話は私たち一切聞いてない事にするから安心なさい」

もっと陰謀めいた秘密を期待していたんだろうお母様の、どこか気の抜けた言葉に、アンジェは心底ホッとした顔を見せた。元々お人好しと言つか、裏表の全くない子だから、半分なくて同然の約束を破るのも心が痛かったんだろう。

……それとも、彼との約束だから辛かったの？

やだ、胸がむかむかする。まるでタラの燻製を食べ過ぎた次の日の様に。

けれど、その後発したアンジェの爆弾発言に、私のむかむかは一気に消え去った。

「私…もう王宮には行きません。殿下にも合わせる顔がありませんし、…元々身分違いの場所ですし」

どこか悲しそうな顔で告げるアンジェに、思わず食ってかかった。

「何で！？ そんなのダメよ！」

「どうして？」

冷静に問い返されて言葉に詰まる。

どうしてって、どうしてって、…そんなの言えるわけがない。

私の作ったドレスを着せて、あそこで踊らせてみたいなんて、私のだだの煩惱以外の何ものでもないもの。

でもこればかりは諦めきれない。あの作りかけのドレスはどうなるの！？

「お願いよ、アンジェ。思い直して」

「ごめんなさい、ミシエル。でももう決めたの」

いつになく頑なな態度。そんな態度、今までとったことないくせに。

その時玄関先で、来客を告げるベルが鳴った。

「はい」

私たちの様子を見て修羅場中と認識したのか、珍しくリリア姉様が席を立てて玄関へ向かう。

その間も私は懇願し続けた。

「お願いアンジェ。私の一生のお願いだから、せめてもう一度…」

「いいえ。ミシエルのお願いでもこれだけはきけません」

「これだけ私が頼んでも？」

「ごめんなさい。もう行けない」

「そんなあ……」

まるで恋人たちの愁嘆場の様に縋る私の姿に、それでもアンジェの意志は変わらなかった。

今まで一度も私の言う事を聞かなかった事なんてないのに。

いつだってにこにここと、素直に何だって言う通りにしてたのに。

一体これは何なの？

そんなにあの王子様との約束を破ったのがつらかった？

それとも反抗期に突入したのかしら。

ぐるぐると埒もない考えを巡らせながら説得を続ける私と拒むアンジェに、一石を投じたのはやはりリリア姉様だった。

「そうもいかない様よ、アンジェ」

「え？」

「お城からの招待状。——あんた宛のね」

言いながら、リリア姉様は王紋の入った封筒を顔の横で振って見せる。

宛名はしっかり「アンジェリカ・ハートウィック嬢」となっていた。

茂みの中の兎たち

「ほら、左足一步出して、右足でステップ！」

「あ、うわ、きゃあ」

どべちゃつと派手な音を立てて、我が妖精姫は床に腰を打つ。

「…まだまだねえ」

「ごめんなさい…」

相変わらず泣きそうな声で彼女が呟いた。私は腰に手を当てたま
ま、助け起こそうとはしない。

我ながら大人気ないとも思っけど…でも自分で行くと決めたんだ
から、一人で立ち上げられる様にならなきゃダメでしょう？

結局アンジェはもう一度舞踏会に行く事になった。

もっとも皇太子殿下自らの招待を、下々の庶民が断れる筈もない。
それでも、うじうじと行き渋るアンジェに、さくつと決意を促し
たのはリリア姉様だった。

「本当に申し訳ないと思うなら、ちゃんと会って謝れば？」

あまりに悪びれず、且つ単純過ぎて、よもやアンジェの罪悪感の
元となった例の告白を無理強いした張本人だと気付かせない、大変
もつともな意見だった。

…こういうの、厚顔無恥って言うんじゃないかしら。怖いから言
わないけど。

そんな矛盾にさえ気づかず、この天使ちゃんは深刻そうな覚悟さ
え見せて、城に行く事に同意したって訳。

「確かに、ちゃんと謝らなきゃ」ってね。

大体侍女のかっこをして、しかも口が利けないふりをしたのが自

分の意志じゃなかったんだから、私を責めたっておかしくないのに、誰かのせいにしたたり悪く思うなんて、思いもよらないらしい。

箱に入れて飾って起きたい程お人好しの甘ちゃんだわ。

もしかしたらアンジェをコントロールするなんて、赤子の手を捻るより簡単かもしれない。この子の正義感や同情心を擦ればいいんだもの。

現にお母様やお姉様はそれに気付いている。

あまつさえそれを実行する事に、これっぽっちの躊躇いもないだろう。

そして…私にだって、それが出来ないとは誰に言える――？

もつとも！

それはあくまで精神的な話よ！

今は目の前の大きな問題を片付けなきゃいけない。

だって舞踏会に行くからには、ダンスはマスターさせなきゃならないじゃない！

呼ばれて踊れませんじゃ、それこそ打ち首獄門にされても文句は言えないわ。なんてったって、相手は絶対権力だもの。

だから再特訓を開始したってわけよ。せめて一番簡単なワルツくらいマスターさせなきゃ、いくらなんでもまずいつてーの！

「だけど舞踏会に行くならドレスがいるわね」

しかもある程度上等なものを、と、リリア姉様に招待状を手渡されたお母様は、思いがけない臨時出費に気付いて微かに眉をしかめた。

「それなら、今作っているドレスサンプルがあるから、アンジェ用にサイズを直すわ。宣伝にもなるから一石二鳥でしょ？」

大嘘もいいところ。

けど、こんな日の為にこっそり作っておきましたなんて、とてもじゃないけど言えやしない。

特に――

あんな風に私を見るアンジェを見ちゃった後ではね。

大した秘密がなかったとは言え、アンジェが言いたくなかった事を、私はお母様達と一緒にになって暴いたのだ。

あの子が私に対する信頼を失ったって、仕方ない。

だったらせめてもの罪滅ぼしに、最高に似合うドレスを用意したってバチは当たらないだろう。

……もちろん、アンジェにそれを着せたい下心が、これっぽっちもないとは言わないけど。少し……まあほんの幾らかはね。

お母様やお姉様は宣伝の二文字であっさり納得してくれた。

ビジネスライクって大事よね。

「でも、本当に良かったの？ ドレスサンプルって、最近ミシエルがこっそり打ち込んでたやつでしょう？」

あんな事があったなんておくびにも出さず、アンジェはすまなさそうに訊ねる。

あらやだ、どん臭い顔していつの間に気がついてたのかしら、この子ったら。

まったく、侮らないで気を付けなきゃ。

「何度か舞踏会に行つて触発されたからね。でもドレスなんて誰かが着なきゃ、ただの布の塊だもの」

床に座り込んでいるアンジェに、やはり助けの手を差し伸べる事もないまま、私はかがみこんで視線の高さを合わせた。

「だからあんたは精々私のドレスを世に知らしめるべく、ちゃんと

華麗に踊って見せてよ」

難しいとは知りながら、それでも無表情を装って激励してみる。
実際のところ、この義妹が王子様と踊れる事が、私にとって嬉しいのか悲しいのかよく分からないのだけど。

「う、うん……」

つくづくダンスが苦手らしいアンジェは、肩を落として口ごもる。
「大体、皇太子殿下が招待した以上、少なくとも最低一曲は彼と踊らざるを得ないじゃない。幸い彼と私なら背格好もあまり変わらないから、私を殿下だと思って練習に励みなさい！」

人差し指を突き出して、破れかぶれな私の言葉に、アンジェの何かが科学反応を起こす。

「ミシエルを……王子様だと思って……？」

言いながら彼女はみるみる完熟トマトの様に真っ赤になった。

……え？

ちよつと待つて……！？

一体何なのよお、その反応は……！！

結局、舞踏会でのアンジェのダンスは恙無く終わった。

最初のワルツを何とか踊った直後、殿下はアンジェを連れて雲隠れを決め込んだからだ。

王宮の噂雀がスキャンダルに飛びつくのは火を見るより明らかだったけど、私はそれどころじゃなかった。

だって、王子とアンジェを（しかもあんなにあんなに可愛らしく美しく着飾ったアンジェを！）二人つきりになんかしたら……いたいで人を疑う事を知らないアンジェが、涎を垂らした狼の前の仔羊に思えて、あんな事やこんな事が脳裏を侵食し、ぐちゃぐちゃにかき混ぜる。

いーやー、やめてー！ー！！

そんな私の心配をよそに、彼らは最初に出会った裏庭にいたわ。
ええ、そりゃあもうあっさりが見つかった。

微かに聞こえる楽しそうな話し声。

茂みに隠れて息を殺す。

なあに？ 何を話してるの？

…い、言つとくけど、ぬ、盗み聞きじゃないわよ！？ 一応家族
として、保護者として当然の権利と言うか、心配するのは当然でし
よ！？ だからこれは不可抗力！

理論武装をきっちり終えて、私は茂みの中で耳を澄ました。

「…それであんなに必死な顔をしてたんだ」

「だって…殿下のおみ足を踏んでしまったらと思うと気が気じゃな
くて…」

「だったらさっさと連れ出したのは正解だったかな」

「はい、やっと安心して息が出来ますわ」

「そう、よかった」

…………。

ふうん、楽しそうじゃないの。

特に危険そうな感じもない。いや、まだまだわからないわ。昔か
ら言っじゃない『男は狼なのよ、気をつけなさい』ってね。

「でも見違えるように綺麗だよ、そのドレス姿。いや、この間のメ
イド姿も充分可憐だったけど」

「そんな…」

当たり前でしょ！ 私がこの子の為に夜なべして作ったドレスなんだから！

メイド姿だって、鼻血噴くほど可愛かったわよ！

頬を染めて照れるアンジェの姿がありありと浮かび、脳味噌が沸騰しかける。

「君みたいな人を妻に出来る男は幸せだろうな。素直で正直で従順で」

「やめて下さい、殿下…」

ぎゃく、何を言ってるのこの男は！ よもやアンジェを妻にとか思っていないでしょうね？ そんな事出来るはずないでしょう！ 幾ら何だって身分が違いすぎるわよ！

それはさすがにアンジェにも分かっていたらしい。

「どうして？ 僕が君を気に入ったらまずいのかい？」

「だって…身分が違いすぎます」

そうよ！ 確かにアンジェは可憐だし清纯だし誰にも負けないくらい可愛いけど！ 王族に嫁ぐには爵位さえないんだもの。無理に決まってる。

だけど王子様はめげなかった。

「アンジェリカ、王族にとって一番危険な事は何か分かるかい？」

「え？」

「それは飢饉でも侵略でも災害でもない…革命だよ」

「革命…？」

「そう。民が王家に反旗を翻し、その没落を望む事。それが平和と墮落を感受し続けた王家にとっての一番の脅威だ。だから王家は民に慕われていなくてはならない。——分かるかい？」

「え、…ええ」

「つまり、例えば嫡子である僕が一般庶民から妻を迎えるのは、民の人気を得るためにも有効な手段と言う事だ。理解した？」

うつわ、なんて事！！

国民の支持を得る為なら、爵位がなくてもOKって事！？ 信じられない！ 信じられない！

「あの、でも…、殿下は本当に好きな方がいらっしゃるのでは…」
「…ああ、それは」

そうそこ！ そこをはつきりさせてもらわなくちゃ！
思わず興奮して身を乗り出しかけたせいで、茂みががさりと揺れてしまった。

二人の会話がぴたりと止まる。

「あの、殿下…？」

「…いや、ここの茂みにはたまに野兎がいるらしい。場所を変えようか」

ちよつと待つて！ 聞き耳立ててるのがばれた！？
でも二人つきりにはさせるもんですか！！！！

勇んで立ち上がろうとするのを後ろから羽交い絞めにされた。

「ふんが、ふふ…！」

「だ・ま・れ」

地獄の底から響く様な低い声は、なんとリリア姉様だった。いや、
くん、いつからそこに！？

「これ以上は追っても無駄よ。行きましょ」

ひそひそ声で引つ張られる。

「なんでそんな事が分かるのよ！」

「だって、そろそろお開きの鐘が鳴るもの。ちゃんとアンジェは戻

してくるわ」

姉様がそう言った途端、城の塔楼の鐘が大きくなり始めた。舞踏会の終了を知らせる12時の鐘。

「本当に…あのこ戻ってくる…？」

「大丈夫。行くわよ！」

いやに自信満々な姉様に手を引っ張られて、無理矢理その場を後にする。

リリア姉様が言った通り、ホールの戻るとお母様の横にアンジェは戻っていた。

私が作った愛らしいドレス姿で。

何事もなかったかのように、ふんわりと微笑んでいる。

その笑顔を見て私は何故か泣きそうになった。

アンジェリカ、アンジェリカ。

あなたと王子の会話を思い出すと、この心が張り裂けそう。

ねえ、

私はこれから一体どうすればいいのかしらね…。

涙のキス

「…シエル」

あの後…、殿下と何を話したか、聞き出そうとしたけど無理だった。

泣くのを堪えた様な上目遣いの瞳で、それでもきっぱりと「ごめんなさい、言えない」と珍しく言い切って唇を噛む。

…だから！

何でそこでうつすら頬が染まってるのよお！

「…シエル、ミシエルってば！」

何故か今回に限っては、お母様や姉様も何も言わなかった。どうして？

「馬鹿ねえ、こう言う時はこうするのよ」

「え？ リリア姉様？ ——あ」

ばーんと盛大な衝突音と共に、突然後頭部に衝撃的な激痛が走り、目の前に大量の星が散った。

これは天の川？ それともマゼラン大星雲？ 夏の花火大会にはまだ早いわよねえ…

「…じゃなくて！ 何するのよ！？ 死ぬかと思ったじゃない！」

「あんたのそれ」

言いながら、リリア姉様が大きなハリセンを片手にもう一方の手で私の手元を指指す。

「そのドレスはあんたの服とくつついていいものなの？」

「…え？ きやつ！」

頭をさする左手から針を持つ右手に意識を移すと、縫いかけのドレスの裾と私の服が重なって縫われている。ぎゃ~~~~~！！！！「何でもつと早く教えてくれなかったのよお！」

しかもみつちり目の詰まったまつり縫い。いやあん、解くの大変~~~~。薄い生地なのに、傷めず戻せるかしら…

「ごめんなさい、あの、何度も声をかけたんだけど、あの、ミシエル、おかしい顔になってて…」

「はつきり魂の抜けた顔って言うて良いわよ？」

心配げなアンジェリカに、リリア姉様の絶妙なフォロー。見事なまでに私を奈落の底に突き落としてくれたわね。

「…ああ、ノルマがまだたくさんあるのに…」

有難い事に、たった一曲しか踊らなかったにも関わらず、アンジェの着ていたドレスは大好評だった。

裾を斜めにカットして何枚も重ねた薄い生地が、踊る度にふわりふわりと広がって、その幻想的なシルエツトはさながら花の精の樣ももちろん華奢なアンジェの体型が一役買ってる事も大きいんだけどね。

その分上半身はシンプルなラインで品良く仕上げてある。それでもよくよく見れば、透かしたレースや細かい刺繍が同系色でがあらわれ、光の加減で微妙な陰影がつくって訳。

我ながらなかなか良いデザインだったと自負している。

そしとそれは王宮に来た貴婦人達のおめがねにもかなったらしい。お母様はあのドレスの出所を訊かれて、勿体つけながらもホクホクだった。

「奥様がお召しになるのなら、やはり唯一の一品物でなければ！」

上品に扇で隠した口元は、きつと笑いが止まらなかったに違いない。

姉様は姉様でいつもなら材料費はめいっばいケチるくせに、今回に限っては糸目をつけないと確約してくれた。

結局あの日以来、私は多忙な毎日が続いてるって訳。

もっとも忙しければ余計な事を考えずに済むから有難いと言えば有難いんだけど。

「全然煩惱だらけじゃない」

「だから、心を勝手に読まないでよ姉様の意地悪！」

「ミシエル、根を詰めすぎじゃないかしら。少し休んだら？」

尚も心配そうに覗き込むアンジエに、片手を振ってみせる。

「冗談言わないで。せっかく私のデザインが認められたのよ？　ここで頑張らなきゃ嘘でしょ？」

「そう言いながら心はあらぬ方向を向いている気がするけど」

ああう、どこまでもリリア姉様は容赦なく突っ込んでくる。

いいわよ、それならそれで、こっちも考えがあるんだから。

「そう言えば、リリア姉様とトーマス殿下って知り合いだったの？」
どう見たってあれは初対面じゃなかったわ。

姉様にちろんと意地悪な目を向けながら、私はアンジエが淹れてくれた濃いめのお茶に手を伸ばす。こんなのいっぺんに解けやしない。ちよつと息抜きしなくちゃね。

うふふ、姉様が言いたくなくても根掘り葉掘り訊き出してやる。

そんな私の心を見透かすように、姉様は気が抜けるほどあっさりと答えてくれた。

「昔、王立図書館に通ってた頃お会いしたの。あの頃は殿下もその辺のクソガキと変わらなかつたけどね」

「うわー、仮にも皇太子様をクソガキ扱い？」

我が姉ながら、本当にどこまでも怖れ知らずと言うか…

「だって、自分より小さい女が難しい本を読むなんて生意気だって、

つねられたり髪の手引つ張られたりしたんだから」

抑揚のない喋り方に、秘められた怨念を感じるのは気のせいかしらね。

でも分からないでもない。姉様って昔っから愛想がなくてその上偉そうにしゃべるから、誤解されやすいって言うか…今より敵を作りやすかったのは確かだわ。特に逆らわれることに慣れてないクソガキ…もとい王子様なら、そりゃあ癪に障ったんじゃないかしら。でもそんな事を知らないアンジェは「そんなひどい」と哀しげな顔になる。

「同情なら必要ないわ。きつちり仕返しはしたから」

…ああ、やつぱり。

姉様がやられっ放しの筈がない。きつと誰にもばれない様な陰湿な手で復讐したに違いない。

案の定、姉様は面白そうに口の端を上げて言った。

「真夜中に呼び出して王宮にまつわる怪談を聞かせた上、効果音^{ラップ}を仕掛けといたら、泣きだして漏らしてたわね」

………すつごく想像つくわ。復讐をきつちり完遂して、魔女の如くにやりと微笑む幼き日の姉様の姿が。

だからこの人だけは敵に回したくないのよねえ。

それなのに、何を思ったのかアンジェリカったら楽しそうにくすくす笑い出す。

「きつと、殿下にも忘れられない思い出になったわね」
思い出と言うよりトラウマになったと思うけど。

しかも自分より小さな女の子の前でちびつたとなれば、その傷はマリアナ海溝より深そう。

「こんな私や殿下の昔話を聞いて嬉しい？ アンジェリカ」

「嬉しいって言うか…、あの、私は兄弟とか幼馴染とかいなかった

から、その…」

何故か俯いてもじもじする姿に、私の中のどす黒いものが鎌首をもたげ始める。

「いいのよ、あれでも基本的にはジェントルだし、さすがに今では大人になったでしょう」

あれって殿下の事かしら。この場合そうよね。どこまでも辛辣な姉様の言い方に、殿下に同情したくならない事もないけど…目の前のアンジェの笑顔が苛立たしさを呼び起こす。

「他にも殿下との間に何かなかったの？」

アンジェは私にお茶のお変わりをついでくれながら訊いた。

それはただの話の接ぎ穂だったのかもしれない。

でも義妹のそんな心浮き立つような笑顔は、これ以上見たくなかった。少なくとも彼の話題での笑顔は。

「私、やっぱり仮眠してくるわ。アンジェ、後の片づけはお願い」「あ、はい」

素直に返事するアンジェの向こうで、姉様がにやにやしながら唇だけではつきりゆつきりくつきりと一言。

じ・ご・う・じ・ば・く。

——自業自爆。

くっそー！ー！ー！ー！ー！やるつもりがやられた！

悪かったわね！ー！ー！

煮えくり返る腹の虫を必死で宥めながら、私は半端に縫い付けられたドレス付きのシャツを脱いで、自室の自分のベッドにもぐりこんだ。

目が覚めたのは真夜中だった。

無性に喉が渴いて、台所へと向かう。

聞こえてきたのは細い歌声。アンジェったらまだ片づけてるのかしら。全くとろいんだから。

そう思いながら扉の隙間からそつと覗くと、小さく歌いながら、長い柄の簪を相手に踊っているアンジェの姿が見えた。

逆さに立てられた簪は誰のつもりなのか、とても楽しそう。

いつもの悲壮な覚悟がないせいか、踊るステップも軽やかでいっ
になく上手に見えた。

おかしいわよね。着ているのはドレスじゃなくていつものぼろい
服にエプロン姿だと言っのに。

ボリリュームを抑えた小さな鼻歌は、まるで夢の中にでもいる様に、
うつとりしているようにさえ見える。

——ねえ、その閉じられた瞳の中にいるのは誰？

その人は砂色の髪と榛色の瞳をしていたりする？

信じられないほど凶暴な嫉妬と怒りが胸の中で暴れまわる。

「楽しそうね、アンジェリカ？」

開いたドアの枠にもたれかかって、問いかけた私の声に彼女の動
きがぴたりと止まった。

「あ、やだ、い、いつからそこに？」

一人で踊っていたのを見られて恥ずかしかったのか、アンジェは
手にしていた簪をさつと後ろに隠した。

「たった今よ。なあに？ ダンスの練習ならいつでもつきあってあ
げるのに」

「あの、だってミシェル疲れてそうだったし」

「可愛い妹の為ですもの。協力は惜しまないわよ、ほら」

手を取ろうとした私の何に怯えたのか、アンジェの体がびくりと震える。

「それとも私相手じゃ不満？」

につこり笑って言った私の、咎めるような響きを感じ取ったのだらうか。いつもは全く鈍感なくせに？

「そんな事……」

「ほら、いらつしやい」

箒を取り上げて床に放り出す。

「あの、ミシエルどうしたの？ いつもと違う……」

「……あんたもそうやって、姉様みたいに私を苛めるのね」

「そんなんじゃ……」

どこまでも押し殺した声で笑う私に、アンジェは怯えた表情を見せ始める。

やだ、そんな顔されたらこつちが苛めなくなっちゃうじゃない。

私は半ば無理矢理抱きすくめるようにして、ステップを踏み出した。

軽いアンジェの体が、私の腕の中でふわりと浮く。

彼女を捕らえながら思わず口を突いて出たのが王子様の話だったんだから、本当に私って自虐的。

「ねえ、アンジェ。あの方、好きな人があるんだと思う？ それも

心に秘めなきゃならない様な相手が」

「……よく分からないけど、もしかしたら、たぶん……」

「もしそうだとしたら……お気の毒ね。本当に好きな人と添い遂げられないなんて」

「……………」

「でも、仕方ないわよね。高貴な御身分の方だもの、そうそう思い通りにはいかないでしょう」

「……やっぱり……そうなのかしら……」

私の胸のあたりで、長い睫毛が哀しげに震えた。

「…なあに？　もしかして、あんたも思い当たる事でも？　例えば心の奥に秘めた人でもいるの…？」

不意に、アンジェの宝石みたいな瞳が大きく開いて、じっと私を見上げる。射抜く様なその視線はどんな感情も湛えておらず、それ故にまっすぐ突き刺さった。

「ううん、いないわ」

静かに答えながら微笑みを形作るその唇が、あまりに透明な哀しみを含んでいる様に見えて――

分かってしまった。

無邪気でとろくて天使のようだった、私のたったひとりの妹。だけど。

――ああ、いつのまにか。恋をしているのね。

それが限界だった。

「え？　や――っ！」

小さな体を抱きしめて拘束し、無理やり唇を重ねる。嫌がって顔を背けようとしても容赦しなかった。

唇を割って舌をもぐりこませる。

食いしばろうとする歯をこじあげ、その奥の舌を引きずり出し、無理やりからめ捕る。

あの男のものになるくらいなら、いつそこの手で――

喉の奥で抵抗するように呻く声が聞こえたが、何の罪悪感も湧かなかった。

犯して蹂躪して、壊してしまいたかった。

永遠に続くように思えたその時間も、本当はほんの一瞬だったのかもしれない。

ふと力を緩めた隙に、細い手が力いっぱい私を突き飛ばす。

無様に床に尻餅をついた私を、潤んだ瞳のアンジェが睨み付けていた。

「馬鹿——！ ミシエルなんて、大っ嫌い」

僅かに息を弾ませながら、アンジェはそれだけ言うときッチンを飛び出した。

私は動く気にもなれず、その場にしゃがみこんだまま微動だにしない。

おかしくなつて笑おうとするけど、うまく顔が動かなかった。

だって、どうすれば良かったの？

家族として愛されるくらいなら、たぶん…それ以上に強く憎まれた方がよっぽどマシだったなんて。

アンジェ、あんたに言ったら、迷惑以外の何物でもないわよね。

私の横で、放り出した筈が、まるで打ち捨てられたように力なく転がっていた。

涙のキス（後書き）

本文中の「自業自爆」はリリアの造語です。雰囲気を読み取って頂ければ幸いです

決意

王宮からアンジェへ2度目の招待状が届いたのは、それから一週間後の事だった。

あれ以来、アンジェとはまともに口を聞いていない。それどころか顔を合わせる事もほとんどなかった。

私が仕事を理由に自室に引きこもっていたからだ。

（ミシエルの馬鹿！ 大嫌い——！）

涙に濡れた叫びがこだまする。

どうして私達は出会ってしまったのだろう。

リフレインが叫んでる。

…まあ嫌われるのは当然よねー。酷い事をしたんだから。

たとえキスだけとは言え、無理強いすれば強姦と一緒に 傷付けようという意図して、その通りになっただけ。

言い訳する気も弁解する気もさらさらないけれど。

たまに廊下でニアミスしても、アンジェは顔を背けて何も言わない。食事はいらなと言ったら、部屋の外に食事の乗ったワゴントレイが置かれていたのが、あのこらしい精一杯の好意だろう。

だから。

その朝、家族が一堂に会したのも一週間ぶりだったのだ。

こここのところの私とアンジェの様子に気付いているのかいないのか、リリア姉様は相変わらずクールな笑みを浮かべて招待状を翳して見せた。

「何と今度はドレス付き」

従者の手に寄って運ばれてきた豪華なドレスは、型こそロイヤルクラシックなものだったけど、だからこそ侮れない清楚さと上品さが漂っていた。

スタンダードナンバー
成る程、伝統の底力ってやつね。

胸から二の腕、背中までぐるりと横に巻き付く柔らかいシフォンは肩の丸みを強調し、若々しさと初々しさを醸し出す。その分絞られたウエストとマーメイドラインのスカートは、光沢のある上品なロイヤルブルーのタフタだった。

首の後ろで結ぶ様になっているレースのリボンは、普通よりかなり長めで、ダンスを踊ったら妖精の羽か触覚の様に見えるに違いない。

どれもこれも、アンジェの愛らしさと清純さを生かした、美しいデザインだった。

「ほら、すつごく素敵よ。よっぽど殿下に気に入られたのねえ、アンジェリカ！」

珍しくお母様もドレスを前に目をキラキラさせている。
悔しいけど、私の目にもそれは最高級のドレスだった。

「今回こそ絶対断れないわね。専属のダンス教師でもつける？」

姉様に至ってはいつものケチケチ精神が棚の上に仕舞われている。
きつと、もつと大きな儲け計画がその頭の中で展開中に違いない。

「あの、私……」

唯一困惑した様なアンジェが、ちらつと窺う様な視線で私を見た。

「良かったわね。是非行つてらっしゃいよ」

ロイヤルブルーのドレスを切り裂きたい衝動に駆られながら、私は何事も無かつたかの様ににっこり笑つてみせる。

だって…完敗だもの。

何せ相手は王子様で、しかも私が仕立てた物より似合うドレスをアンジェに用意できるのだ。

それに…

彼が好きなんでしょう？

こんな私の側で家事に明け暮れるより、愛する人の側で大勢の召し使いに傳かれて暮らす方が、よっぽどいいに決まってる。

だから…

王宮に行けばいい。

私の目の前から消えて、お伽噺の様に幸せになればいい。お願いだから—そんな同情する様な目で私を見ないで。

「そうね。ドレスのお礼を言わなきゃ…」

アンジェはまた例の哀しげな笑みを浮かべると、朝食の後片付けをするためにリビングを出ていった。

「あんたはどうするの？ ミシエル」

リリア姉様が思わせぶりに訊いてくる。

「そうね、今回はパスしようかしら。頼まれたドレスもまだ縫いあ

がってないし」

「……そう」

「ちよつとミシェル、納期には間に合うんでしょね？」

お母様が片眉を上げて不安そうな声を出す。

「大丈夫よ。でも舞踏会当日には目に隈ができてそう。そんなやつれた顔で、人前に出たくないしね」

私の言葉に、お母様とお姉様は顔を見合わせて、視線でこそこそ会話する。

（本当に大丈夫なの、この子？）

（任せて、私が何とかするから）

「わかったわ。じゃあ、無事にドレスを仕上げたら、あんたは少し休みなさい」

「ありがと、お母様」

部屋に戻ると、布をかぶせた作りかけのドレスに目をやった。注文の品とは別にこっそり作っていた代物だ。

「これも… 必要ないかもしれないわね。あの王子様なら、もっといいものを用意できそうだし…」

それは決別を覚悟するための、本人が着る事もないかもしれない純白のウエディングドレスだった。

「じゃあ、行ってくるわね。留守は頼んだわよ」

「はい。行ってらっしゃい」

着飾ったお母さま達を玄関で見送って、私は一人ダイニングに戻る。

お茶でも淹れようかと思ったのだ。

改めて一人っきりの我が家は、まるで火が消えた様に静かだった。

考えてみれば、この家に来てから本当に一人になる事は一度もなかった。

お母様やリリア姉様が仕事で出かけていても、大概私はアンジェと一緒にだったからだ。

何もできないあの子に料理を教え、掃除や洗濯を教え、畑と一緒に耕し、ようやく一人で買物に行かせられるようになったのは、どれくらい経ってからだった？ それでもその時は不在を感じられないほど、ここかしこにあの子の存在感が溢れていた。

怒鳴りつけたり呆れたり散々したけど、あの子が愚痴や不平を言う事は一度もなかった。

慣れてくれば、それは楽しそうに一緒に家事をこなしていた。

最近ではもう食器を割ったりバケツの水をひっくり返すこともない。

（ミシエル、今日のパイはちゃんと膨らんだわ！）

些細な成功に、あまりに嬉しそうに喜ぶから、こっちだって嬉しくなった。

ふと思いついてアンジェの部屋へと向かう。

初めは上品な服や可愛らしいおもちゃでいっぱいだった女の子らしい部屋は、お母様の徹底した損害賠償制度ですっきりした部屋へと変わっていた。

さすがにその後、私のおさがりばかりと言う訳にもいかなかったので何枚かアンジェの服も作ったけど、それでも動きやすい作業着ばかりだったから、華やかさは全然ない。

クローゼットを開けると、一番派手なのは先日のピンクのドレスとその次がメイド服用のエプロンドレスだった。

その事に不満を漏らした事は一度もないけど、若い女の子にしてはやはり酷な仕打ちだったんじゃないかしら。

ハンガーに掛けられたメイド服をそつとおろし、あの子のぬくもりを味わう様に抱きしめた。

「何、バカなことやってんの？」

「ぎゃっ！！！」

嘘！　なんでリリア姉様が家にいるの！？　舞踏会に出かけたんじゃないあ……！

「あの、これはその！　私が作った中でも会心の出来を味わっていたと言っか！」

「黙れ変態」

……ちよつと待つて。いくら姉様でも鋭利すぎじゃないかしら。只でさえナーヴァスになっている傷口に、塩とマスタードを業務用の量でなすりこまれたわよ？

がつくりと膝をついて言い返す気力もない私に、一切の容赦もせず冷たい声が響いた。

「ねえ、ミシエル。あんた、いつまでそうやってお父様に縛られてるつもり？」

「……………はあ？」

驚きのあまり、姉様を見上げてぽかんと口を開く。

お父様？　……って、あのクソ親父の事かしら？

あんなぼんくらのことなんか、これっぽっちも考えていなかった

けど。

なんであれの話題が今出てくるの？

啞然とする私を見下すように、姉様は言葉を続ける。

「だって、お父様が亡くなってからじゃない。あんたが女の恰好をしてそんな風に喋るようになったのは」

「……！」

「まあね、予想外に似合ってたし、あんたがそれで色んな事を乗り越えられるのならって、私もお母様も黙認してたけど、…アンジエなんか初め相当戸惑ってたわよ？ お兄様と呼ぶべきか、お姉様と呼ぶべきか」

「………！」

腰に手を当てたまま、姉様は少しさみしげな顔で笑った。

「そのままであんたが幸せになれるのならそれでも構わないと思ってたけど…いいの？ そんなんでアンジエを諦めてしまつて。あの子が好きなんでしょ？」

うわ！ 姉様ったら気付いてたんだ！？ そりゃあ勘のいい姉様だから気付かれてもおかしくはないけど…、もし気付いてたらとつくに強請りのネタに使われると思つてた。まさか黙つて見守つてくれるなんて…嘘でしょお？

「だって…私…」

「言うべきことがあるならちゃんと伝えなさい。それで玉碎したらちゃんと諦めもつくから」

「…いいの？ あの子が殿下と縁付けば、商売には願つたり叶つたりなんじゃあ…」

「バカ言わないで。弟の幸せを無視してまで儲けたいとは思わないわよ。お母様だって同じ気持ちなんだから」

屈みこんで私の顔を覗きこむ姉様の顔に、慈愛の笑みが溢れてい

る。信じられない、こんな顔もできるなんて。今まで一度も見た事なかったんですけど！

「姉様…」

「さあ、とつと用意して行くわよ！ それとももう一回これを使われない！？」

後ろ手に隠されていたものを見てぎよつとする。

だから！

なんでハリセンなんて持ってるのよオ！！

「それに…アンジェったらダンス用の靴を忘れていったのよね」

姉様が指差すその先には、確かにダンス用のシューズボックスが。てつきり空箱だと思てったのに、中身入り？

「うそ！！」

信じられない！！ なんでそんなにどんくさいのよ！？ あのド

ジ娘！！！！

「招かれた本人が遅れる訳にいかないもの。だから代わりに私が取りに来たの」

「わかったわ！ 用意してくるからちよつと待ってて！」

「それに…あんたに頑張ってもらわなきゃ…」

小さく呟かれた姉様の声に、着替えに行こうとした足を止める。

「——え？ 何か言った？」

「いえ、何も？」

につこり笑った姉様の笑顔に悪魔の尻尾が見え隠れした気がするけど、今はそれどころじゃなかったのだ。

部屋に戻って大きな断ち切り鋏を手にとった。

そうよね、私だって男だもの！ やる時はやらなきゃ！

待ってらっしゃい、アンジェ。今、世紀の告白をしにあんたのと

ころへ行くからね！

ガラスの靴で踊ろうか

「それは……」

「ですから、私が履いているのは正直な人にしか見えないガラスの靴なんです」

息せき切って王宮のダンスホールに着いてみたら、中央では笑顔で固まっているトーマス殿下と、大真面目にふざけた台詞を吐いている我が義妹の姿があった。

辺りは彼らに注目してざわついている。

当然よね。

皇太子が踊ろうとしている相手は、世にも豪華なドレスを纏いながら裸足だったんだから。

きゃーっ！

アンジェったら何て事をほざいてるの！？

相手は王子様よ！？

絶対権力なのよ！？

いくらシューズを忘れたからって、そんな言い訳が通用する訳ないじゃない！

それなのに、アンジェは恐ろしい程堂々と、目が点になった殿下の顔を直視していた。

信じられないすつとこどっこい！

誰か嘘だと言って~~~~っ！！

「失礼しました殿下！ 義妹はまだ幾分にも幼くて！」

咄嗟に間に入り込んで、アンジェを背に庇う。

「貴君は——、ハルログの……！？」

トーマス殿下は更に驚いた顔になって私を指差した。

人を指差すなんて高貴な方にあるまじき行為だけど、そんな事に構っている余裕はない。

「すみません！ この場はこれで御容赦を」

それだけ言って深く一礼すると、私はくるりと振り返り、このとんでもない裸足の天使の背中と膝裏に腕を差し込んで抱き上げる。いわゆるお姫様だっこというやつだ。

「きゃ…っ」

悲鳴を上げそうになるのを視線だけで黙らせた。

睨み付けた意図はこのぽんやりちゃんにも伝わったらしい。慌ててレースの手袋をした手が口許を押さえる。

「それでは、失礼致します」

アンジェを抱き上げたまま私は再度頭を下げると、あくまで堂々とホールを出ていく。

後ろから宮廷雀達の囁く声が聞こえたが、一切無視した。

「誰、あの方―？」

「あんなハンサムな紳士、いらして…？」

「どっちかって言うとな男装の麗し―」

「ハルログのって…」

「でも髪がみじか…」

「礼装が…」

聴こえない聴こえない聴こえない。

こんな時は悪びれちゃダメ。パニックに乗じて、私は何事もないふりを押し通す。

だって…それ以外どうしようもないもの。そうでしょ？

結局行き着く先は例の裏庭だった。控えの間に向かっても召し使

い達に注目を浴びてしまう。
騒ぎが下火になるまで、隠れるのに最適な場所はここくらいだった。

「ミシエル、あの……」

「お馬鹿！ あんぽんたん！ いくら靴を忘れたからって、もつと上手い言い訳が思い付かなかったの！？ あんた下手したら不敬罪で磔にされてもおかしくなかったのよ！？」

アンジェに何か言わせる間もなく、私は一気に捲し立てる。血の気が引いて寿命が10年は縮んだわよ！

そんな私の怒りに対抗する様に、アンジェはらしからぬ大声をだした。

「忘れたんじゃないもの！ わざと…持っていかなかったんだもの！」

…はああ！？

「ますます馬鹿じゃないの！ 一体どうしてそんな事―！」

「だってミシエルが！」

「私は何よ！」

「殿下との結婚を薦める様な事を言うから…！」

「え…？」

みるみる内にアンジェの瞳は潤んだ涙の中に溺れ、その頬を幾筋も透明な滴が流れ落ちた。

「どうせ…叶わない想いだったら…いつそ不敬罪で殺された方がマシだって…そう思ったんだもん…」

ちよつと待って。

すつごく混乱してきたわ。

何がどうなってるの？

叶わない想いって…アンジェは王子が好きなんじゃなかったの？

「ミシエルこそ…何で今更男装してるのよ…」

「え？ あ、これは…」

自分を見下ろして恥ずかしくなる。

男子の礼装なんて何年ぶりだろう。捌くスカートがないのが頼りないし、肩のマントも落ち着かない。何より詰まった襟元が窮屈だった！

短く切った髪の毛のせいで、うなじがすーすーするー。

「どうせ似合わないわよ……」

混乱の極みに達した私は、そのままズルズルとしゃがみこんだ。

「ミシエル……？」

心配そうなアンジェの声。

本当に馬鹿な子ね。

私には、あんたに心配してもらえる権利なんてこれっぽっちもないのに。

「いいからそのまま聞いて。」

私の……私とリリア姉様の父親は、外では誰にでも愛想がいいけど、家に帰ると酒を飲んで暴れる人でね……」

突然始まった昔話にアンジェはきょとんと目を見開いた。

そんな顔も可愛いと思ってしまっ自分苦笑が漏れる。

「本当は……ただの小心者だったのね。誰かに嫌われないか、敵を作っていないか、いつも人の顔を窺ってはビクビクしてた。その分家では荒れ放題。……私にはよく『お前は男らしくなれ』って、……事ある毎に殴られた」

バイオレンスな話の展開に、アンジェは両手で口を覆って息を呑む。

「だから——その反動が出たのね。父親が死んだ時、私はお母様と姉様に宣言したの。『私はこれから男を捨てて、女として生きます』ってねー。アンジェ、あんたに最初にあげた服は、その時初めて自分用に作ったものだったの」

まだ慣れない手で、型紙を起こしてスカートを縫った。下手くそ

だっただけ、一念発起した、思い出の服だった。

「それからは御覧の通りよ。女の格好をして女の言葉遣いで…あなたにも困惑させちゃったわよね」

「それは…」

有難い事に家事は向いていた。料理も掃除も苦にならなかったから、傾いていく伯爵家の召し使いが減る度に、私は進んでそれをするようになった。

お母様や姉様が家事が苦手だったのも幸いしていたのかもしれない。

「女の振りは正直楽で——父への復讐も兼ねて私はそれを押し通してきた。だけど…そうもいかなくなってしまった」

この子に会ってしまったから。

この呆れるほど不器用で役立たずでぼんやりの、極上美少女に出会ってしまったから。

「私の話はそれだけ。あなたの番よ、アンジェ。どうしてわざと靴を置いてったりしたの？」

裏庭には心地いい風が吹いて、かきあげていた私の前髪を揺らす。静かな声で問う私に、些か釈然としない顔をしながらアンジェはぽつりぽつりと話し出した。

「確かに—ミシェルに会った時、戸惑ったわ。男か女が分からなかったし…。でも、お父様が亡くなつてすぐ、抱き締めてくれた事があったでしょ？『決して一人にさせない』って言って—」

「うん。ちゃんと覚えてる」

「あの時—、思ったの。きっとミシェルは天国のお父様とお母様が合体して現れたんだって…」

……。

すごい思考の飛躍を見たわね。

そんな私の心を読んだのか、アンジェは少しむくれた顔をする。

「笑ってもいいわよ？ 私だって、それがつまらない幻想だって事は分かってる」

拗ねた口調にホツとする。もし本気だったら、精神的近親相姦もいいところ。

「だけど――、ここでミシエルが私の前に立って殿下から庇おうとしてくれた時、…初めて気付いたの。あ、男の人の背中だって」

俯き恥じらう彼女に、私まで恥ずかしくなった。

え？ 何？ あの時そんな風に？

うわ、顔が火照る！

「それでも…どんな理由があるにせよ、ミシエルが本当は女でいたのなら…、私は妹でいるしかないでしょ？」

上目遣いで悩殺された。

嘘。

嘘でしょう？

よもやアンジェがそんな風に思っていたなんて！

「私が必死に諦めようとしてるのに、ミシエルは殿下と私の仲を疑うし、そうかと思えばあんな―キ、キスとか、するし…」

「…ごめん」

「本当に、悲しかったんだから。訳が解らなくておかしくなりそうだったんだから！」

「本当に、ごめん」

「バカ。ミシエルなんて大嫌い―！」

耐えきれなくなったのか、再び彼女の瞳が洪水に見舞われる。

私は自分の馬鹿さ加減に、天を仰いだ。穴があつたら入りたいくらいだ。

――でも、最後にひとつ聞いておかなきゃ。

「で？ ガラスの靴ってのはどこからきてるの？」

ぐしゅぐしゅ鼻を鳴らしながら、アンジェはやはりぽつぽつ話を出す。

「昔…死んだお母様が言ってたの。女の子は生まれつきガラスの靴を履いているって。でもそれは片っ方しかなくて、本当に私を愛してくれる人が、もう片一方を持ってきてくれるんだって…」

しゃくりあげながら話すアンジェに、彼女の今は亡き母親に思いを寄せる。

それは先に逝かねばならぬ自分が娘に贈る事のできる最大の夢物^{ファンタジー}語だったんじゃないだろうか。

さすがこの子の母親と言つべきか…発想がなんてドリーミーアンドクリーミー…

私のお母様なら『まずは飯!』とか『世の中銭!』くらい言いそうだけど。

そんな私の心中の苦笑をよそに、アンジェは例の悩殺上目遣いで先を続ける。

…う、その目は反則! そんな目されたら押し倒したくなっちゃうじゃない!

男は才オカミなのよ、気を付けなさいと言う、古い歌を知らんのか!(そりゃ、知らんわな)

「でもね、私は…その靴を持ってきてくれるのがミシェルならいいなって思ってた」

背筋にぞくつと来る天使声。

…もう! 限界!

「アンジェ、私は—!」

「そうしたら本当に王子様みたいな格好で現れるんだもの、びっくりしちゃった」

ぐあ!

あまりに純真且つ無邪気な笑顔が、私の煩惱を凌駕する。
だめ…誰か助けて…。

「どうしたの？ ミシェル、苦しそう…額に汗が…」

「いや、大丈夫」

ゼーはーゼーはーゼーはー…

荒い息を必死で整えると、私はその手に小さな靴を持つ降りをする。

落ち着くために、小さな咳払いをひとつ。

「アンジェリカ。君が探しているのはこのガラスの靴かい？」

アンジェが息を飲んでだまりこむ。

やば…、やっぱ気障すぎたか…。

けれど、彼女は瞳を潤ませたまま「ええ」と私の手から靴を履く降りをする。

セ、セーフ…！

クスリと笑って私も自分の靴を脱ぐと、その辺に放り投げた。

夜風に乗って、裏庭にも小さく舞踏会の音楽が届いていた。

そのまま片手を前に出して腰を落とす。

「私とー踊って頂けますか？」

アンジェは月の女神に祝福されたような、静かに満たされた顔で微笑んだ。

「ええ。喜んで」

専属庭師が刈り揃えただろう、下草が素足に気持ちいい。

月の光と遠く響く音楽は最高にロマンティックだし。

——結果として。

喜びに酔っ払う私達のダンスは、主に一方的に私の足が踏まれる運命を呼び込んだので、靴を脱いで踊ったのは、きつと正解だったに違いない。

エピソード・プロポーズ（前書き）

最終話。

エピソード・プロポーズ

「賭けは君の勝ちだ！ 結婚してもらおうか、リリア・ドルチェリカ！」

舞踏会の翌朝、まるで親の仇でも取りに来るような勢いで乗り込んできて、大真面目にトーマス殿下が言うものだから、何の果し合いかと思っちゃった。

しかも姉様は姉様で、甘いムードなんかまったくなしに、腰に手を当てたままいつもは無表情なその唇の端を1センチだけあげると「いいわよ、結婚してあげても」と尊大な口調で言い放つ。

「と言う訳ですので義母上、細かい段取りはまた後程改めて。今後ともどうぞよろしくお願いします」

最後の最後だけ紳士然とした振る舞いで礼儀正しくそう言うのと、彼はとつとと屋敷を後にする。

お母様と言えば、突然の嵐の来訪に動じる事もなく、リリア姉様の方を向いて「まあいいんじゃない？」とのたまった。

私は呆然と食べかけの朝食のトーストの端をかじったまま、微動だに出来ない。

えーと。

朝っぱらから何が起きているのかしら。

「結婚」って言った？

誰と誰が？

その前に「賭け」とか聞こえた気がするのとは一体何？

思いつきり脳内パニックに陥ってる私に向かって、義妹兼恋人（恋人よ、こ・い・び・と！ きゃ~~~~）のアンジェリカがにっこりほ笑む。

「よかったわね。殿下も姉様も長年の想いが叶って」

「なあに！？ あんた知ってたの!？」

「え？ だって、今だから言えるけど、殿下ったら私と会っている時ずくずくとリリア姉様の事ばかり訊いてたのよ？」

「うつそー……」

あのいかにも王子様然としたトーマス殿下と、あのうちのリリア姉様が？ 長年想い合っていた？

想像つかないと言うか、むしろ怖くて想像もしたくないんですけど。

「そりゃあもう、しつこいくらいに『どんなものに弱いか』とか『どんなものが苦手か』とか……」

それって、長年の想いが叶うと言うには全然甘くないシチュエーションじゃないかしら。そう思うのは私だけ？

いや、呆けてる場合じゃないって！

まだ馬車が出る音は聞こえないから、さっさと捕まえて今のうちに色々聞いとかなきゃ！

「お待ち下さい、殿下！ 姉と結婚なんて本気ですか!？」
リリア

屋敷の前の車寄せに止まった馬車の前で、今にも乗り込もうとする殿下を直前で捕まえた。

「君は…ミシエルと言ったかな？ よかったな、義妹とうまくいつて」

「ありがとうございます。正確にはミハエルなんですが…もう何と云うか人生が薔薇色で…うふ、うふふ…、じゃなくて！」

「本気だが、何か問題か？」

「いえあの……」

何と言うか、あまりにも好戦的なプロポーズだったので、一応

ちゃんと突っ込むべきかと。

「仕方ない。彼女との賭けに負けたからな。約束は約束だ」

「賭け？」

「君達の義妹が城に来て、三回以内に君が男に戻るかどうか」

「……………あのクソ姉貴！ 何が可愛い弟の為にだ！ 自分の玉の輿賭けてやがった！！」

「それで…殿下が勝ったらどうなったんですか？」

何の気なしに思い浮かんだ疑問符に、殿下は大真面目な声で答える。

「リリアが私にプロポーズする事になっていた」

「はああ？」

「……………あっほくさー」

何なのよ、この二人？

「そんな顔をするがな、考えてもみる。あのリリアがだぞ？ あ・の・リリアがだ！ 俯き恥らいながら頬を染めつつ『私と、結婚して…』なんて…言われてみる！ 一生笑って暮らせるわ！」

あー、さいですか。と言うか、万が一リリア姉様が賭けに負けていたとしても、そんな言い方は絶対しなかったと思うけど、ここは黙っておくのが大人の分別と言うものよね。

拳を握り締めて熱弁を振るう殿下に、この国の将来が不安になる。一応跡取りよねー、大丈夫かなー。

「それに…」

「それに？」

「王宮なんて一皮向けば魔物の巣窟、あれほど彼女に似合う場所はあるまい？」

そういつて、殿下はにやりと笑う。やだ、深く納得しちゃった。

ある意味、姉様をよく理解してると言えるかも。

「そうそう、忘れるところだった。君にも話があったんだ」

「はあ、なんででしょう」

なんかもう、どうでもよくなってきたので、おざなりに相槌をうつ。

「うちの宮廷専属職人^{デザイナー}のフランツが、君と一度ゆっくり話をしたいそうだ」

「え？ フランツって、あのフランツ・ベルナルド！？ 本当ですか！？」

思わず胸の前で両手を握りしめる。

「君が直属天使に作ったドレスが目に残ったらしい。その後、贈り物に作らせたドレスは、彼が躍起になってデザインしていたからな」

「うわ嘘！ フランツはその道じゃあ知る人ぞ知る超有名デザイナーなのよ！」

そんな彼とお話できるなんて、しかも私のデザインに目が留まっていたなんて…緊張で眩暈しそう…

「まあ、そんなわけだ。末永くよろしく頼むよ、義弟君^{ミハエル}」

「あ、は、はい！ 姉をよろしく願います！」

見えなくなるまで馬車を見送っていた私の後ろから、いつの間によらりリア姉様が忍び寄っていた。

「やあねえ、中身は相変わらぬクソガキのくせに、いっぱしの王子様ぶっちゃって」

その言い方はどうかしら。姉様の婚約相手なんですけど。

それに本物の王子様なんだから、王子様然としてたって、問題ないと思う。

「それより騙しただろ？」

「あんた、まだ男言葉と女言葉が混ざってるわよ？」

「いいから放つといて！」

いきなりそんなに器用に切り替えられないわよう！

「騙したって何が？」

「何が可愛い弟のためだ。自分の玉の輿目当てで殿下と賭けてたんじゃないか」

「あら、なんだかんだでアンジェとうまくいったんだから、結果才ライじゃない」

ぐっ、それ言われると返す言葉はないんだけど。

一応言いたいことは言ったし、それ以上勝ち目がなさそうだから、大股で屋敷の中へ避難を試みる。でも、姉様はしつこく追いかけてきた。

「それとも彼がアンジェにプロポーズした方が良かったの？」

だめ！ それだけは絶対ダメ……っ！！！！

「それにお母様も爵位返上しなくてすんだって喜んでたしね」

「まあ、それは……」

一応爵位は男子相続だから、私がその権利を放棄すれば、返上しなきゃならなかったのよね。

……う……でもなんか面倒くさい……気もするかも。

「まあ、まずは私の婚礼衣装ウエディングドレスね。言っとくけど、あんたの部屋にあるやつをそのままスライドなんて許さないからね？」

「見たの！？」

「どう見たって私には似合わなさそうなデザインだしね」

「当たり前でしょう！？ あれは私がアンジェの為に……！」

「私があに？」

「ぎゃっ！」

「ミシエル？」

廊下の向こうからやってきて、小首を傾げて見上げるいとけないアンジェに、私ったらまだ色んな覚悟ができていない。

そもそもやっと思相愛なんだもの！ 恋人同士の甘いいちゃいちゃシーズンを、楽しまなくてどうするの！

「さかるのもそこにしときなさいよ」。結婚前に弟が変態行為で逮捕なんて嫌だからね？」

だから、心を読まないでっば……！！！！

「リリアー？ 今後の事なんだけど…」

リビングからお母様の呼ぶ声が聞こえてくる。

「はあい、今行くわ」

さすがに鶴の一声、お母様の呼び出しだけは姉様も無視できなかった。

ふっ、助かった。これ以上いじられ苛められたくない。

「アンジエ、あんたはこんな女になっちゃダメよ…？」

やっと二人つきりになったのを良い事に、私はアンジエをキッチンの隅に連れ込んで、小さな体を抱きしめて、かいぐりかいぐりその感触を楽しむ。これくらいはいいわよね？ さかった内に入らないわよね？

「やだ、どうしたの、ミシエルったら…」

くすぐったいのか、アンジエはくすぐす笑い出した。

「デレってるの」

「？」

意味が通じなかったけど、説明するのも野暮つてもんだし。

そうよ！ デレったのよ！ 一度デレツたんだから、今後は思いっきりデレデレさせてもらおうじゃないの！

「あー、でもしばらくはリリア姉様の婚姻で忙しくなりそうねえ」
アンジエを抱きしめたまま、私は大きなため息を吐いた。

「お姉様の結婚式だもの、絶対素敵なドレスを作ってあげて？」

「…あんたって、本当にいい子ねえ」
とろいけど。

あの人、私たちを賭けの対象にしてたんだから。

…まあ、正しくは私を、か。

さて、あの魔女の様な姉様にはどんなドレスが似合うかしらね。いつそ真っ黒とかどうかしら。

不意に、部屋に隠してある作りかけの純白のドレスを思い出す。

「あのね、アンジェリカ」

「なあに？」

「いつか…色んな事が落ち着いてちゃんと私に覚悟ができれば…その時はちゃんと言つから…」

「――」

無言で私の声に耳を傾ける彼女に、できるだけ低い声でそつと囁いた。

「今は――、キスしてもいい？」

「あ」

小さな声を上げると、彼女のうなじが真っ赤に染まる。

「あの、えっと…」

うつうつ、うろたえてるうろたえてる、可愛い可愛い可愛い！
超可愛いイ〜！！！

「…はい」

私の腕の中で、蚊が泣く様な声が答えた。

私はゆっくりと体を離すと、彼女の額に口付ける。

そつと閉じられたまぶたと、すべらかな頬へも。

そうして、やはり赤く染まった柔かい耳元に心を込めて囁いた。

「愛してる、アンジェリカ」

今はこれが精一杯。

だけど、伸びあがるように爪先立ちになり、彼女の細い腕が私に首に巻き付くと、「私も」と掠れる声が聞こえたから、確かめる様に桜色の唇をなぞる。

そうして、私は万感の思いを込めて、アンジェに恋人のキスをした。

前編・天使変調（前書き）

その後のミシエル×アンジェリカ、番外編です。
アンジェリカ視点。

前編・天使変調

お父様が不意の病気で亡くなる前に、私にできた新しい家族は、かなりゴージャスで、どこかエキセントリックな人たちだった。

いかにも貴婦人といった毅然とした気品を持つお母様と、才媛と名高いクールな雰囲気のリリアお姉様、そして何より不思議だったのが、兄とも姉ともつかぬミシエルだった。

「いいわよ、年も大して違わないんだからミシエルって呼び捨てで」
お兄様と呼ぶべきかお姉様と呼ぶべきか考えあぐねていた私を見かねたのか、ぶっきらぼうにため息をついてそう言ったミシエルは、神殿のブロンズ彫刻さながらに優雅で美しく、けれどその声はどう聞いても男性のそれだったのだ。

彼は一見とつつきにくく言葉遣いもぞんざいだったけど、本当は優しい人なのだとすぐ分かった。

大好きなお父様が亡くなってから、泣くまいとしながらつい涙を溢してしまった私を、大きな手と広い胸で抱き締める。

「大丈夫よ。あんたを一人にはしないわ」

艶のあるビロードの様な声は、本当に天使を思わせるものだった。彼の胸は広く暖かくて、まるでお父様の胸の中にいるように私はすっかり安心してしまった。

思えばそれが彼に対する信頼の第一歩だったんだと思う。

何も出来なかった私に一から色んな事を根気よく教えてくれたのも彼だった。

早逝した母が生きていたら、こんなだったかと思わせる様に。もしくは少し厳しめで。

私はミシエルが大好きだった。

彼は家政については驚くほど博識で、まるで魔法使いの様に、有り合わせの材料からご馳走を作ったり、一枚の布から素敵なドレスを作ったりする。

彼といったら、巻き起こる魔法の数々で私は目をみはるばかり。いつだって彼は私の尊敬の的だった。

何もできない私を甘やかしはしないけど、決して見捨てたりもしない。

冷たいふりをしながら優しく、ちょっぴり照れ屋で、それを隠すために意地悪な物言いばかりするのだ。

優しくて綺麗なミシエル。

もちろん今でもそれは変わらない。

けれど…、少しその形は変わったと思う。

——うっん、大分、かしらね。

「ん、…んふ、…ん——」

重ねられた唇の端から、あえかな息が漏れる。私は堪らなくなつて、彼の背中に回っていた腕に力をこめた。

そうでもしなきゃ、溺れそうだったんだもの。

私の口の中を自由に泳ぎ回っていたミシエルの舌が、もう一度深く差し込まれて私のそれを捕らえると、名残惜しそうに唇が離れていく。

ようやく息をついた私は、目を閉じたまま彼の胸に倒れ込んだ。気持ち良すぎて目眩がしそう。

「やだ、そんなに気持ち良かった？」

ミシエルが嬉しそうにクスクス笑う声が聞こえる。

「だって…」

泣きそうな私の声に、ミシエルは、晒されたうなじに唇を滑らせた。

ちゅ、と音を立てて、彼の柔らかい唇が私を責め立てる。

「アンジエ、可愛い」

そう言われただけで、体温が上昇するのを自覚した。

彼は私の兄（姉？）から恋人になった。ずっと好きだったと言われて、晴天の霹靂と言ふ言葉の意味を思い知ったと思う。

だって、今でこそ家事はそこそこ出来るようになったものの、私と来たら相変わらずドジなミソツカスで、何でも出来てあんなに綺麗なミシエルに特別に思っただけで貰えるなんて思わなかったんだもの。

彼が私を大事にしてくれるのは、私が義妹だからだとばかり思っていた。

親を亡くして何も出来ない私に同情してくれているのだと。

だけど、私に告白してくれて以来、彼は二人つきりになるチャンスがある度に「愛してる」と囁き、甘いキスを繰り返す。

「あの、そろそろお母様達が帰ってくるから、夕食の準備をしなきゃ…」

離れ難いのを我慢して私は上目遣いで彼を見上げた。

「そうね…、じゃあもう一回だけ！」

彼は私のおとがいを掬い上げると、触れるだけのキスをする。

「もう、ミシエルったら！」

さっきだってそう言っただけに！

「はいはい。そんな恐い顔しないで。せっかく可愛い顔が台無しよ？」

彼はそう言うとな本当に最後と言わんばかりに私の額に掠める様なキスをしてキッチンを出ていった。

「もっ……っ」

本当は私だつてもつとミシエルといたい。抱き締められるのもキスするのも嫌いじゃない。

だけど今、彼はもうすぐこの国の皇太子様に嫁ぐ、リリア姉様のウエディングドレスを作っているのだ。

しかもただのドレスじゃない。そのドレスの出来如何に寄つて、デザイナー王宮専属職人一のベルナルドに弟子入りできるかもしれないのだと言つ。

そんな彼の将来をかけた一大事に、私が邪魔するわけにはいかない。

それに――

壁に掛かっている小さな鏡を見てため息を吐く。

小さくて華奢な身体。

全体に丸くて頬骨の目立たない幼い顔立ち。

巻き毛の金髪は、家事の時は邪魔だから編み込んである。しかもミシエルの手によって複雑に編み込まれたりボン付きだ。

どう見てもそれはいとけない少女のそれで……

ねえ、ミシエル。

貴方に『可愛い』って言われる度に、不安になるなんて言ったら、笑われる？ それとも呆れられる？

元々可愛いものや綺麗なものに目のないミシエル。

貴方が好きと言ってくれた私が、貴方の好きな人形や小動物と同じじゃないと、言い切つて欲しいのは私のワガママなのかな。

小さくて、ふわふわで、頼りなく愛らしいなんて、愛玩物の定義そのものな気がする。

彼の私に対する想いが、彼の偏愛する綺麗なものに対する愛情と違うなんて誰に言える？

（バカみたい。私、強欲過ぎるんだわ）

好きだと言われて、大事にされて、不満を覚える自分が嫌になっ
てくる。こんな事を言うのは不遜だと解っているけど、…彼に恋を
してから、私は醜くなっている気がする。…

(バカねえ。しつかりなさい！)

それでも思い浮かぶのは少し意地悪な彼の顔で。

丸くて柔らかい自分の頬つぺたを、ペチペチ叩いて気合いをいれ
た。

そして、私は彼やお母様達といったちよっぴりスパイシーでバイ
タリテイ溢れる家族に少しでも喜んで貰えるよう、シチュー作りに
取り掛かったのだった。

「だーかーらー、このラインがイマイチだっって言うてるの！」

「そうは言うけど、リリア姉様の身長と体型でもっとハイラインに
入れたらバランスが悪くなっちゃうわよ！」

「それを何とかするのがあんたの腕でしょう!？」

喧々囂々けんけんしょうしょうの言い争いが、部屋の外の廊下にまで響いてくる。

「と、に、か、く！ そのままだったら絶対着ないからね！ 分
かった!？」

ガチャン！と大きな音を立てて扉を開けると、リリア姉様がミシ
エルの仕事部屋から出ていく。

私は口の中で百数えてから、開いてるドアをノックした。

「あの、ミシエル…?」

中を覗き込むと、恐いほど真剣な顔をしたミシエルが、ドレスを
着せられた胸像と向かい合っている。

作る途中で何度か見せて貰ったけど、何度見てもため息が出ちゃ
う、とても美しいドレスだった。

前身ごろの中央、ハイウエストの切り返しから、高く上げられた
スタンドカラーの顎の下まで、細かい飾りボタンがついていて、フ

リルやタツクは一切ないものの、その分身体の線が強調されるデザインになっている。

しかもよくよく見れば、胸元や背中結構大きく透けるレースになっていて、けれどベールに隠されたその透ける肌を目にする恩恵は、夫となるトーマス・シャノン殿下だけだろう。

ウエストから柔らかいシルエットを描くスカートは、当然後ろだけが長く引きずる様になっていて、レースのヴェールと同じ繊細な百合の模様が絶妙の配置で刺繍してあった。しかもヴェールにだけは一部蝶が飛んでいると言う細かい演出付きだ。

何と言うか…清楚なんだけど微妙にセクシーで、これを着た時のリリア姉様の姿は、見ただけで息が止まりそうな気がしちゃう。

さすがに美に拘るミシエルらしいドレスだった。

けれど―

ミシエルはドレスを睨み付けて口をへ字にしたままだ。

「お茶、テーブルに置いておくから飲んでね」

邪魔をしないように小声でそれだけ言って部屋を出ようとすると、腕を掴まれて胸の中に引き摺りこまれた。

「ミ、ミシエル？」

突然の抱擁に、私の声が裏返る。

「黙って。今、鋭気を充電してるんだから」

「は、はい」

珍しい彼の低い声に、私は一も二もなく服従してしまう。

大人しく彼の胸の中にと、息苦しい様な、でもずっとこのままでもいいような、不思議な気分だった。

「ありがと。ちょっと落ち着いた」

「ううん」

よく見れば、彼の彫りの深い目元にはうつすら隈が来ている。デザインが思い通りに行かず、あまり寝てないのかもしれない。

こう言う時は何て言えばいい？

頑張つてなんて、これ以上なく頑張つてるのに言える筈がない。頑張らないでなんてもつと言えない。

結局私は無難な言葉で口を濁すしかなかった。本当に私、気が利かない。

「あの、スコーン焼いたの。ミシェル好きでしょ？ 手が空いたら良かったら食べてね」

埃が入らないように布巾で覆ったお盆を指差すと、私はめいいっぱい彼の喜びそうな笑顔を浮かべる。

「あら。焼き立てならせつかくだから今、戴くわ」

「…いいの？」

「いいわよ。どうせドレスと睨めっこしてても何も浮かばないし」
言いながら彼は腕を上げて身体を伸ばす。

「あら美味しそう。アンジエも腕を上げたわねえ」

「本当？」

「ええ、焦がさなくなったし形も均一だし…うん、生焼けもないわね」

「もう、ミシェルったら！」

スコーンを割りながら中を確かめる彼の背中に、思わずぽかぽか殴りかかってしまった。そりゃあ昔は全部やったけど。ミシエルみたいに黄金色にはまだ焼けないけど…喜んで貰いたくて一生懸命作つたのに。

「あはは。美味しいわよ、これ？ あんたも食べたら？」

そう言つて彼はクロテッドクリームと苺ジャムの乗ったスコーンを口元に差し出した。

今は短くなつてしまった彼の黒髪が、彼の綺麗な額に乱れ落ちている。

いじける気持ちを押し隠して、両手で受け取つて端をかじった。

「うん、美味しい」

目映いミシエルの笑顔にポーツとしながら食べていたら、欠片がポロポロ溢れてしまった。

やだ、ここはミシエルの仕事場なのに！

「はい、慌てない。慌てるとあんたの場合二次災害が起こるからねほら、じつとして」

彼は魔法が使える長い指を私に向かって伸ばすと、頬つぺたに付いていたらしい欠片とクリームを拭い、汚れた指先を自分の唇にもつていく。

その姿がどこか艶めいていて、私の体温はまた上昇してしまう。

「まだ動いちや駄目よ——」

長い睫毛で牽制しながら、そのまま彼は私に近付いて唇の端に残っていた最後のジャムを舐め取った。

「——はい、おしまい」

「あ、ありがとう……」

「どういたしまして。このジャムも美味しかったわ」

「あ、それ春に二人で摘みに行ったやつよ？」

「ああ、そう言えば行ったわねえ。アンジェったらはしゃいでたくさん摘みまくって」

「すつごく楽しかった。また…来年二人で行けるといいな」

「勿論よ。二人で行きましょう。約束」

「うん」

お仕事が忙しくなければ。そう思ったけど、言葉は途中で飲み込まれる。せつかくそう言うってくれたミシエルの優しさに、ケチをつけるようで憚られたのだ。

だって、もしベルナルドに認められたら…もちろんミシエルならお眼鏡に叶うって信じてるけど、…そうしたら今まで以上に忙しくなるんじゃないかしら。

今だって、これまでの半分以上会えてない気がするのに、宮廷デザイナーになったら王宮に住む可能性だって出てくるのだ。もし彼が家を出てしまったら、会えるのは一週間に一度？ それとも一か

月？

後ろ向きな想像ばかりしてしまう自分がつくづく嫌になって、気持ちを引き立たせようと別の事を考えた。

「それにしても、本当に綺麗ね、リリア姉様のドレス」

「……………」

「気に入らないの？」

「そういう訳じゃないけど…そうか、苺…絡まる…」

「ミシエル？」

ぶつぶつと唱えながら、彼は何かを思いついたようだった。

「そうよ、無理に縫い合わせずに蔦が絡まるように巻き付ければ…」

「ありがと、アンジェ！これで光明が差したわ！」

不意に興奮しながら叫びだすと、ミシエルは台の上にあったチュールレースのリボンをドレスに巻き付け始める。

「そうよ、こことここだけ縫いとめて…せっかくだからスワロでさりげなく光らせようかしら、うん…」

見る見る間に、ドレスはまた違ったアレンジを見せ始めた。

「ミシエルってやっぱりすごい…」

「んふふ、たまに自分でもそう思うわ。ありがと」

細かいレースをツタの様にあしらったドレスは、上品さをそのままに、どこか野性味を帯びた戦女神の様な不思議な華やかさを醸し出していた。

「すてき！絶対姉様に似合うわ。ね、ミシエル！」

「うん、まあ、…姉様のあざとさはうまく出せたかしら、ね…」

そう言いながらも彼の顔は満足そうに輝いている。

あざとさだなんて…、もうミシエルったら。

「でも…うらやましいな」

「なんで？」

「だって…たぶん、私にはこう言つの似合わないんだもの」

「こう言つのって？」

聞き返されて、言葉に迷う。

「こつ言つ…その、色つぱいの？」

途端に目をぐるりと回しながら、ミシエルは吹き出しかけたのを必死で堪えた。そのまま両手で口を覆い、上半身を折り曲げて体を震わせている。

「ひどい！ 笑う事ないじゃない！」

「違う！ 笑おうとしたんじゃない！」

あわてる彼の言葉を最後まで聞かず、私は彼の部屋を飛び出した。シヨックだった。馬鹿なことを言った自覚はあるけど。思い切り傷付いたのだ。

どうせ、私は綺麗なだけのお人形さんだもの。

姉様やミシエルみたいに、色つぱくなんかなれないもの！

そう考えたら涙が止まらなくなりそうで、でも止める理由も見つからなくて、部屋に鍵をかけて私はベッドの上で思い切り泣き続けたのだった。

後編・天使墜落

一晚経過して、鏡に映った自分の顔に更に泣きたくなる。

目元はむくんでるし、頬もいつにもまして腫れぼったくて丸い。

こんなんじゃないミシエルにあわせる顔がない。

自己嫌悪で死にたくなった。どうしていつまでも私って子供っぽいんだろう。

それでもものろのろとベッドから這い出してミシエルの作ってくれたメイドドレスに着替える。

その後も色々作ってくれたけど、これが一番動きやすいのだ。

白いエプロンをつけて、鏡の中の自分に言い聞かせる。

「…しつかりしなくちゃ」

家事は私の仕事なんだから。

元々はミシエルと二人でやっていたけど、彼は将来に向けての大事な仕事なんだから、ひとりで頑張らなくちゃ。

朝食を作るために台所へと向かう。裏口から井戸で水を汲もうと外に出ると、そこにはミシエルが立っていた。

「おはよう、うさぎさん」

真っ赤に泣きはらした目を揶揄されたのだと気付いて、怒りと羞恥で顔が赤くなる。

「水、くんどいたから」

「…ありがと」

「それと…言い訳させて」

「何の？」

俯いたまま、取りつく島のない言い方になった。だって、彼とどう接していいか分からない。

「だから…昨日のあれは笑いそうになったんじゃない…」

「もういい。無理しないで。自分でだっておかしい事を言っただけわかってるもの」

私が彼に対してドキドキするくらい、自分も少しは色っぽくなれたらいいかなって思っただけ。そんなの無理だって分かってるのに。「おバカ！ あれは…あれは、興奮して鼻血吹きそうになったのを堪えたの！」

無理矢理私の顔を上向かせて、ミシエルは怒った様に言った。

「あんたが、いきなりあんまり可愛い事を言うから！ あそこで押し倒さなかった私を褒めて頂戴！」

「え？ あ、え…？」

びつくりして言葉が出ない私に、ミシエルは尚も言募る。

「言っとくけど！ あんたにセクシーなウエディングドレスなんか作らないからね！ そんなの他の奴らに見せてたまるもんですか！ 作るんだったら私だけが見れるもの限定だからね！」

どこまでも怖いくらい真剣な顔だった。だけど、最大の疑問をぶつけてみる。

「そんなの…作れるの？」

おっかなびつくり聞く私に、ミシエルは脱力した様にその場になへなしゃがみこんだ。

「誰に言ってるのよ、あんたは…」

「だって…」

「そんなの当たり前でしょ？ 私が普段からどれだけ脳内シュミレーションしてると思ってるのよ！」

嘘、嘘、だって…

「けど、私にそんな要素全然ないし…」

駄々をこねるような私の唇を、不意にミシエルのそれが塞ぐ。

「ん…っ！」

突然のキスはいつもより激しくて、寧猛で、それだけで腰の辺りの力が抜けそうになった。

「言った事なかったかもしれないけど…」

「え…？」

耳元でささやかれる言葉に、私は朦朧となりそうになる意識を何とか集中させる。

「キスした直後のアンジェの顔、すっごくセクシーでそるわよ？」

「……！」

嘘！

思いもよらぬミシエルの言葉に、私は体中の血が沸騰するのを感じた。

「言っとくけど - 絶対あんな顔、ほかの男に見せちゃダメだからね？」

背後に炎が立ち上るようなミシエルの迫力に、つい私はうなずいてしまう。

「う、うん」

あんな顔って、どんな顔？ 私、どんな顔してるの？

やだ、やだ、恥ずかしくて、まともにミシエルの顔が見れない。

「顔、隠さないでっば」

「だって…今、ひどい顔してるんだもの…」

むくんでるし、赤くなってるし。不細工もいいとこだ。

「どんな顔だって、アンジェは最高にかわいいわよ」

「嘘。ミシエルの目が絶対おかしいんだから」

「あら、私の審美眼を疑う気？」

「だって…」

クスクス笑うミシエルに何とか喜んでもらいたくて、私はその昔リリア姉様に教えてもらった魔法の呪文をふと思いついて唱えてみる。上目遣いになったのはそれでもちよつと疑っていたからだ。

こんな普通の言葉に効力があるとは思えない、んだけど…物は試しで。

「あの…、どんな事でも遠慮なく私にお命じ下さいね、…お兄様？」

途端、ミシエルの体が腰から二つに折れて倒れこみそうになった。

「やだ、ミシエル！ 大丈夫！？」

「な、何なのよ、その新しい攻撃は！」

「え？ あの、以前リリア姉様がミシエルなら絶対喜ぶからって教えてくれて…」

「…あのくそアマあ…、覚えてろよ！？」

聞き慣れない下卑た言葉が彼の美しい唇から漏れる。

「ミシエル！？」

見れば彼の肩がふるふると震えている。必死で何かを抑え込んでいるようだった。

「ごめんなさい！ そんなに嫌がるとは思ってなくて！」

「いや、嫌がつてるわけじゃなく…いえいいの、大丈夫よ。ええ、大丈夫ですとも」

どこか鬼気迫る雰囲気でミシエルは呟いている。

よく分からないけど、彼が辛そうだったので、慰めようと彼の背に腕を回した。

「ごめんね。私がおかしくなったばかりに、ミシエルに嫌な思いさせて」

「いやちよつと、あのー！」

「でも私、ミシエルの為ならどんな事でもするからね？」

それでも彼の辛そうな様子は変わらない。

「でも何かして欲しい事があったら本当に何でも言って？」

「もお限界。…ビバ、私の忍耐力」

「え？ ミシエル？ しっかりして、ミシエル！」
気が付けば、彼は私の腕の中で白目を剥いて気を失っていた。

「大丈夫よ、どうせただの寝不足だから」

「でも、…もしミシエルに何かあったら」

「本当にアンジェったら、このバカが好きなのねえ。中身はただの万年発情期なのに」

「そんな事ないわ！ こんなに優しくて綺麗な人、他にいないもの！」

泣きながら叫ぶ私を、リリア姉様が呆れたように見ている。ベッドの中にはミシエルが苦しそうな顔で「うーん…」とか「うっ…」とか唸りながら、体を横たえていた。

「まあいいわ。ドレスは結構うまく仕上がってたし、あんたは思う存分このバカの看病でもしてなさい」

「…はい」

涙でハンカチをぐしゃぐしゃにしながら、私はミシエルから目を離さない。

姉様はそれだけ言うと、静かにミシエルの寝室から出て行った。
何せ、姉様だって王室に嫁ぐ直前なんだもの。忙しくない訳がない。
い。

そつと額にあてていた濡らした布を、搾り直そうと手に取った時、眠っていたはずのミシエルが瞳を半分だけそつとあけた。

「…姉様、出てった？」

何故か意識のなかったはずのミシエルが、こっそりと囁く。

「気が付いたの？ 待っててね、今お水…」

「いいからこっちに來て」

上半身を起こして私を手招きする。

「…なあに？」

彼に覗きこむ様に近づいた私を、ミシエルはベッドの中に引きずり込んで口付けた。

「ん、ん、ん…！」

朝の井戸端同様、激しい彼の唇の動きに、我を忘れて彼にしがみ付く。

息もできないほど深く深くミシエルの舌が私の中に入ってきて、絡み合いながらこのままひとつになりたい、なんて思った。

背骨が溶けて崩れそうな気がした瞬間、ミシエルの唇が私から離れる。思わず淋しくて引き留めそうになったのは、仕方ないと思ってくれるかな。

「…ほら、そんな顔する」

「？」

「すっごく色っぽい顔」

「そんな事言われたって…自分じゃ見えないもの」

「うん、そうよね」

すっごく優しい顔でミシエルは私の髪を撫でていた。

「この、自制ぎりぎりの放出バランスが…難しいのよねえ…」

そう苦笑しながら、ミシエルの体が私の上に落ちてくる。

「ミシエル…？」

よく分からないけど、彼が辛そうだったから私も悲しくなる。

「私にできる事はない？」

だからそう訊いたんだけど…更に彼は脱力したようだった。私に重なっている彼の体重が重くなった気がする。

「…そうよね、私みたいなぶきつちに、出来る事なんかないわよね。ミシエルなら何でも私より上手にできるんだし…」

馬鹿な事を言ってしまったと後悔の念にかられた。でも、そう悟られたくなくて無理矢理笑って見せたんだけど、彼は気が付いたみたい。微かに体をおこし、真剣な表情で私の目を覗きこんでくる。

「…さっきの本当？」

「え？」

「アンジエにできる事があれば、なんでもしてくれる？」

「ええ、もちろん」

するとなぜか彼はどこか苦しげな瞳で問いを重ねる。

「もし…あんたを泣かすような事になっても…？」

どう言う事だろう。ミシエルが私を泣かせるような事って？ けれどミシエルの目はますます切なげに揺れ始めた。

「あんたが…泣いてやめてと言っても止まらない様な事をしたら…それでも私を許してくれる？」

私の上にある彼の体が、肩を抑える手のひらが、少し熱くなった気がした。

彼がこんなに苦しんでいる理由はよく分からないけど…辛そうなのだけは分かったから、私は思いのたけを込めて正直に答える。

「するわ。どんな事でも」

「アンジエ…」

その時の継る様な瞳がまるでいたいけな子供の様に見えて…つい私は彼を守らなきゃいけない母親の様な気分になってしまったのだ。だから精一杯の優しい微笑みを浮かべて真実を答える。

「だって…どんな事があつたって、ミシエルが私に酷い事する筈なもの」

その事だけに關しては、私は彼に全幅の信賴を置いているのだ。たとえ天が落ちてても、地が裂けたとしても、ミシエルだけは信じてる。彼だけは私を絶対傷つけたりしない。

——と、心から真剣に答えた私の上に、再度、脱力したミシエルの体が降ってきた。

「どうしたの、ミシエル！ 大丈夫？」

「…ダメ」

力のない声で彼が言った。気が付けば頬が濡れているのは…涙？
ミシエルが泣いてる？

「泣かないで。大丈夫だから！ 何があっても絶対ミシエルは私が
守るから！」

慌てて彼の頭を胸に掻き抱いた。ぎゃーとかむぎゅーとか変な悲
鳴が聞こえた気がするけど、気にする余裕なんてない。私は私なり
に必死だったのだ。

非力だけど。

まだまだ何にもできないけど。

彼の為ならなんだってできる。できる様になつてみせる。

いつまでもいたいけな少女でなんかないんだから。

彼に庇護されるだけの子供でなんかないんだから。

そう思ったら、ずっと胸の奥にあつたもやもやがちょっとだけ晴
れた気がした。

たぶん。

彼だつてこんな風に何か辛い事に耐えたり、迷つたりする事もあ
るんだつて、わかつたからかもしれない。

やがて大人しく私に抱かれるがままになつたミシエルが、何かを
吹っ切つたように私の背に腕を回してぎゅっと抱きしめると、哀し
みとも喜びともつかないいつもの皮肉な口調で笑いながら言ったの
だった。

「本当、天使つて最強にして最凶だわね。それともこれは私が神に
与えられた試練なのかしら？」

「え？ 私にとって最強の天使はミシエルだけど？」

「……………そんなあんだでも、大好きよ、アンジェ」

少しだけいつもより低い声で囁きながら、私の頬に口付ける。

結局、私がそんな彼の言葉の本当の意味を知るのは、もう少し後
の話である。

もっともその日は思った以上に遠からずやってきて、やっぱり私
が嫌がるような事では決してなかったんだけど、と言うか、むしろ
これ以上ないくらい嬉しい事だったんだけど、口に出すのは恥ずか
しいから彼にはしばらく内緒なの。

後編・天使墜落（後書き）

最後までお付き合い頂きありがとうございます。

尚、リリア姉様の番外編が「ムーンライト」に收藏されています。

R18指定になるので、御了承下さる方のみ、良かったら合わせてお楽しみください。

「リリア・ドルチェリカ」

←

<http://novel118.syosetu.com/n6323/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0680r/>

舞踏会にはガラスの靴で

2011年5月26日07時55分発行